新制中等新國文 卷七

375.9
Mi20
資料室

41766
教科書文庫
4
810
41-1938
200030
2294

資料室
375.9
Mi20

文部省檢定濟
中學校國語漢文科
實業學校國語科
教科書
昭和十三年二月十五日

新制中等新國文

編纂者 文學博士 三矢重松
補訂者 國學院大學教授 御歌所寄人 鳥野幸次
補訂者 文學博士 折口信夫

株式會社
文學社

大和路の西行

（岩田正巳筆）

廣島大學圖書之印

広島大学
教
17996
図書

例言

一　本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と、民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。

一　本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に亙りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

目次（巻七）

一 明・淨・直……五十嵐　力……四
二 建國歌……北原白秋……一七
三 おらが春……小林一茶……三一
四 旅人芭蕉……荻原井泉水……一六
五 奥の細道……松尾芭蕉……二四
六 七寶の柱……泉　鏡花……四四
七 自然詩人……土居光知……五五
八 自然の愛……藤岡作太郎……六四
九 折節のうつりかはり……吉田兼好……七二
一〇 流泉・啄木……（今昔物語）……七六
一一 今様…………八一
一二 平安朝時代の郊外……佐々政一……八三

一三 雨の興……松平定信……九二
一四 海　邊……中嶋廣足……九八
一五 芳流閣……瀧澤馬琴……一〇一
一六 膏藥煉……（續狂言記）……一〇八
一七 狂文二篇…………一一六
一八 民謠の話……島木赤彦……一一八
一九 諺……藤井乙男……一二八
二〇 昔ものがたり　上……（古今著聞集）……一三八
二一 昔ものがたり　下……（十　訓　抄）……一四三
二二 文學と人生……小泉八雲……一四八
二三 沼　地……芥川龍之介……一五七
二四 知と愛……西田幾多郎……一六三
二五 日本民族の覺悟……田中寛一……一六九
附錄 國文學の系列と作品

廣島大學圖書之印

一　明・淨・直

五十嵐　力

文武天皇が卽位の際に下された宣命の中に左の詞がある。

是を以て百官人等（四方の食國を治めまつれと任け給へる）國々の宰等に至るまでに、天皇が朝廷の敷き給ひ行ひ給へる國の法を過ち犯す事なく、明き・淨き・直き誠の心もちて、いやすゝみいやすゝみて緩怠ることなく務め結りて仕へまつれと詔り給ふ大命を諸聞食へと詔る。

吾等は此の宣命に在る「明き」・「淨き」・「直き」心といふのが、日本人の性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は代々の詔勅に幾度もくり返されて居る。而も重きを措いて繰返されて居る。其の他古事記・日本紀・萬葉集

五十嵐力　文學博士。明治七年米澤市に生る。早稻田大學教授。

文武天皇　紀元一三五七年卽位。在位十一年にして崩ず、御壽二十五。

宣命　君命を臣下に宣る意より轉じて、命令そのものをいふ。これが再變して漢文にて書きし君命を詔勅と呼ぶに對して、國文のものを宣命と稱するに至る。宣命の初めて收められたる書は續日本紀にて持統天皇より桓武天皇に至る六十二篇を載す。平安朝の宣命は日本後紀に收む。

是を以て云々　續日本紀卷一に出づ。

宰　命持の義にて、天皇の大命を承り頂ひ持ちて、其の國を治むるもの。

古事記　三卷。元明天皇和銅四年（一三七一）九月十八日、太安麿勅を奉じて、語部の稗田阿禮の諳誦せる神代より推古天皇の朝までの傳說・歷史を記錄したるものにて、翌年正月二十八日に成れり。漢字の音訓を以て國語を記し、よく上代の面目を傳へたり。

日本紀　日本書紀。三十卷。元正天皇養老四年（一三八〇）五月成る。舍人親王・太安麿・紀清人等勅を奉じて撰す。神代より持統天皇の朝までの傳說・歷史を漢文にて記せり。六國史の一。

萬葉集　二十卷。撰者不詳。仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四千四百九十六首（短歌四千百七十三、長歌二百六十二、旋頭歌六十一）を漢字の音訓を以て記錄せるもの。

等に於て、重々しい場合に幾たびも用ゐられて居る。これは畢竟、吾等の祖先が心の中に深く感じたこと、大和民族に最も濃く、最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢〻發したのではないか。世に大和民族の特性と稱さるゝ現實・光明・活動・向上・中庸・快活・忠孝・清廉・勇武・義俠・風雅等の諸性質は、概ね此の明・淨・直の三大性を基本として說明されるらしく、殊には三種の神器が此の三大性の標章として遺憾なきやうに思はれる。詳論の餘地なき故に勢ひ抽象的に流れるが、左に一通り其の理由を說く。

鏡の性は明、其の德は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡のやうな明き心を以て、正しく事物を觀た。故にその見方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黑い物は黑いとし、善行に對してはわれを忘れて歎美し、惡行を見ては敢然

として排斥するといふ傾があつた。天照大御神は、鏡を齋き（いつき）て我が大御前を見るが如くせよと仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齋かれてある。詔勅や、祝詞や、君臣應對の詞などに「明き心」といふ語が澤山に用ゐられて居る。これ等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據（しるし）になると思ふ。我が國民の中庸性・折衷性・調和性も一面此の根本性質の結果であらう。我が國には政治・社會・宗教等の諸方面に亙つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突が無い。無いではないが割合に少く、またいつもよい加減に切上げて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來る。毛色が變つて居るので、暫くは爭ふが、やがて御互に道理もあり、無理もあることがわかると、馬鹿らしくて爭論がつゞけられなくなる。そこで

天照大御神は鏡を齋きて云々　古事記上卷の大御神が三種の神器を皇孫瓊々杵尊に授け給ふ條に「この鏡は專（もぱら）、我が御魂（みたま）と爲（し）て我が前を拜（いつき）くが如伊都岐（いつき）まつれ云々」と詔りたまひき」と見ゆ。

祝詞　第一六頁參照。

君臣應對の詞　詔勅・宣命と、臣下より奉る上表文等に見ゆる詞。

騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして長短取舍の調停をする。萬事此の通りである。先づ儒教が入つて來た。至つて尤もらしい事をいふから、早速傭聘して我が固有の倫常に理窟をつけて貴ふ、かくて儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護人となつた。佛教が入つて來た。餘りに奇怪なので暫く押問答がある、やがて說き方の巧妙なのに打込むと、何等の芥蔕なく、中心から歸依してしまふ至尊の御身を以てさへ、自ら三寶の奴と名乘らせらるゝやうになる。けれども、天位の妖僧に歸するを見ては、さすがに默つては居ぬ。かくて遂に兩部習合といふ悧巧な調和案が成りたつた。武家の世になつては佛教を餘興扱ひして、老後の慰め、助命の口實とするやうになつた。德川時代になつては、禪の修行に武士ほど都合よきものはなしなどと、釋迦如來の夢にも見ぬ調和說をと

至尊の御身を云て云々　聖武天皇。東大寺の大佛成るや佛前に向ひて御自ら三寶の奴と稱し給へりといふ。

兩部習合　眞言宗の教理を以て神道を解釋したるもの。兩部習合の稱は眞言密教の金剛・胎藏兩部の教理によりて神道を說明したるに起る。僧空海の唱道なるも德川時代に吉田兼俱等によつて定まれるなるべしといふ。

禪の修行に云々　澤庵禪師（一二二三―一二二〇五）のこと。德川家光の頃の僧にて、不動智神妙錄を著

なふる高僧が現れた。基督教も二三度の喧嘩が濟んで、もうそろ〳〵日本ものに成りかけて來て居る。あのくらゐの騷ぎで明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣・父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではないか。馬上に天下を得た武將が文藝の奬勵に骨折るのも、專制國の君主が「國家人民の爲に立てたる君にて、君の爲に立てたる國家人民にあらず。」などいふのも、——アリストートルはその名著『レトリック』に於て、政體を民主・寡頭・貴族、及び君主專制の四種に分ち、「君主專制の目的は專制君主一身の保護にあり。」と說いて居る。國民の富めるを自らの富と看做された我が歷聖を始め、名君と呼ばれた諸大名の心掛が、西洋の君主のとは、まるで違つてゐるのも、一つは此の國民性の結果であると思はれる。——群雄割據はして、禪も劍法も極意に於ては一致することを說きたり。

馬上に天下を云々　德川家康のことを指す。

アリストートル（前385—前322）　マケドニヤノ大哲學者。「レトリック」「辯證論」

の亂世に、陣中篝火の下に古今集を讀む武將のあるのも同じ戰國に

敵ぞとて何かは人のにくからむ同じみくにの同じ身なれば

と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、皆一つは事を見ること明かに、理に從ふこと流るゝが如き根本性によるのではないか。大和民族は十字軍や佛蘭西革命の如き極端な狂言を演ずるには、あまりに心が明る過ぎる傾がある。吾等は日本人を「公正」といひ、「理に鋭し。」といひ、「感情の平靜を保つ。」といひ、「日本人は何事をも受入るゝ胸懷洞然たる人種なり。」といふた外人の評が、決して、でたらめの空世辭ではないと思ふ。

陣中篝火の下に云々　島津義久の臣新納武藏守忠元のこと。元龜・天正の間に武功の譽高く、かつ文學の嗜み深くして、陣中にもなほ古今集を懷にせしとぞ。

古今集　古今和歌集。二十卷。醍醐天皇の延喜五年（一九〇五）四月十八日、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人勅を奉じて撰す。歌を春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名・戀・雜・哀傷・雜體（長歌・旋頭歌・俳諧歌）大歌所御歌の部門に分類列敍せり。別に貫之の和文の序、紀淑望の漢文の序あり。

敵ぞとて云々　新納忠元の詠。

十字軍　キリスト敎徒が聖地エルサレムを回敎徒たるトルコ人より奪還せんとして、西曆一〇九六年より一二七〇年まで前後七回に亙つて起したる戰役。

佛蘭西革命　西洋の中世と近世とを區劃する大革命にして、ルイ十六世の時フランスに起る。（一七八九—一七九三）。

清淨の德は玉に於て絶好の標章を得て居る。淨と明とは似ては居るが、同じくない。其の異ふ趣は丁度鏡と玉との異ふ趣に似て居る。汚穢混濁を忌むことは清・明共に同樣であるが、清はそれ以上に味ひあり、溫かみあることを要する。たとへば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、溫潤の光、圓融の相、澄徹の趣あることを要するが如きものである。本來日本人は明かに事物を看る長所があるのみならず、外物を看るにも自己を發表するにも、一種の味ひある態度を具へて居た。其の明は空白の明ではなくして、溫潤・圓融・澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶・夜光珠の明である。我が國には古來禊・祓が廣く行はれ、且重要視されて居た。祝詞・宣命をはじめとして多くの歌詠・諷謠は、明き心を現しながら、趣味風韻に富んで居た。しかも其の趣味や形容が諸外國例へば支那の文學に見るごとき張子の虎のやうな誇張の弊がなくて、よく其の實を現し、中味に相應はしい修飾を纏うて居る。むくつけき武人にも、戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は冑に香を燒きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それぞれ相應はしい文學をもつて居る。外國出稼ぎの勞働者が其の日の生活に窮しながらも、猶一二の植木鉢を持たぬはなく、しかしてこれは外國の勞働者に絶えて見ぬ所といはれて居る。大工・指物屋の手に成る、はかなき家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡くすといふ嗜みがあるといはれる。是等は孰れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたも

禊・祓　「禊」は身に罪穢ある時、水邊に赴きて水にて身を淨むる行事。「祓」は神に祈りて災穢を除く行事。

戰陣の間に云々　生田森の戰に、梶原景時は梅花一枝を胡籙にそへて挿す。平家の諸將その風流を稱す。

歌詠を贈答し　前九年の役に源義家は、安倍貞任が奥州衣川に敗れて逃ぐるを追ひ、「衣のたてはほころびにけり」と詠みかけたれば、貞任直ちに「年を經し絲のみだれの苦しさに」と答へける故、義家は、その風雅に免じ、射るを止めて歸る

冑に香を云々　大阪夏陣に木村重成は豫め死を決し、髮を洗ひ香を冑にたきしめて出陣せり。

のではないか。吾等は「日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より勞働者に至るまで皆美術を愛翫す。」というた一外人の批評が、必ずしも虛妄でないと信ずる。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。其の厭ふ所は躊躇・緩慢・首鼠兩端である。曲ること、拗ること、邪なることである。叢雲の劍は其の標章として此の上なく相應はしい。元來、直の德の本領は心の明かに見たところに向つて直前するにある。若し右の三德を一括してこれを一體と見れば、明は其の靜的方面卽ち知の方面で、直は活動方面卽ち意の方面である。知の明かに見たるところを、意が直進して實現する。而して知の見方、意の働き方に、潔くして、言ひ知らぬ味ひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て「父母を見れば尊し、妻子見れ

父母を見れば云々 萬葉集に「父母を見ればめぐしうつくし」(山上憶良)

ばめぐし愛し。」故にその明き心の示すところ所に從ひ、直前して父母に事へ妻子を愛しむ。君を仰げば、「八隅知し大君」「現つ神」として國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い。故に直前して、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍。」の獻身的奉公を致す。此の通りである。而して其の君父に事へ、妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別・利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此處が眞淵・宣長等の國學者が感歎し、自負して措かなかつた所である。無論何處の國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらう。又日本民族にも利害勘定的の行爲が無かつたといはれぬであらう。又自然、直實の行爲に弊害が伴なはぬともいはれぬであらう。けれども、我が民族の特長の一面は兎に角此處に在つたやうに思はれる。其の例は遠い昔では須佐男命、

八隅知し大君 古事記に「高光る日のみこ安みしゝ我が大君」

海行かば云々 萬葉集に「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへりみはせじ」(大伴家持)

眞淵 賀茂氏。國學者。遠江の人。荷田春滿の門人。田安宗武に仕ふ。明和六年歿、年七十三。(一三五七—一四二九)

宣長 本居氏。醫者・國學者。伊勢松阪の人。紀伊侯に仕ふ。享和元年歿、年七十二。(一三九〇—一四六一)

須佐男命 伊弉諾尊の御子。天照大御神の御弟。本文の說話、古事記上卷に出づ。

勝ちすさんでは前後を顧みず、皇祖に存分のいたづらして高天の原を震動される。罪さるれば命を畏みて邊土に行かれる。出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危險をも顧みず、直ちに八俣の大蛇を退治される。寶劍を得ると、これを先に敵なうた天照大御神に上られる。行り方がいかにもはき〳〵として、直・斷・決の文字そのまゝのやうではないか。次いでは倭武尊、兄君を捻み批いで、手足を引つ闕いで、薦に裹んで投げ棄てるといふ亂暴者でありながら、一たび詔を承れば、劍に仗り、千里を獨往して東西の兇賊を平げられた。これ亦須佐男命系統の勇者である。それにつゞいては、鎭西八郎爲朝が、腕白・勘當・九國押領・召還・保元の勇戰・大島配流の一生、これも須佐男系の大立者。是等はいづれも向う見ずの亂暴者でありながら、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば水火も

皇祖　天照大御神。

倭武尊　景行天皇の皇子日本武尊。本文の說話、古事記中卷に出づ。

辭せずに直前するといふ風がある。直斷決勇の權化で、たしかに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローである。

其の他、蒙古の來寇に西海の將士が身命を棄てて防戰した態度を見よ。代々の武士が、

千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男と
ぞおもふ　（萬葉集）

斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠・加藤清正の如き竹を割つたやうに正直な豪傑の、國民に尊崇さるゝを見よ。曾我の五郎・朝比奈三郎のごとき一徹者の、國民に愛さるゝを見よ。豁然大悟の禪宗が盛に行はれたるを見よ。おつと出せば、やつと受ける金平淨瑠璃の流行した趣を見よ。眞僞は知らねど、「正直は一旦の依怙に非ずと雖も終に日月のあはれみを蒙る

千萬云々　高橋蟲麿の詠萬葉集に出づ。

朝比奈三郎　名は義秀。和田義盛の子。勇武多力を以て聞ゆ。

金平淨瑠璃　淨瑠璃節の一。櫻井和泉太夫の創めしもの。この派にて語るものは、必ず坂田金時の子金平を主人公とし、それが稀代の力量を有して、到る處に惡鬼や妖怪を退治することを筋とす。曲節も豪壯にして、元祿以前の江戸に流行せり。

正直は云々　山本常朝著の葉隱（俗に佐賀論語）の中にある詞。

謀計は眼前の利潤たりと雖も必ず神明の罰にあたる」といふ戒が、天照大御神の御言として、神道家に唱へられて居た。武士は「七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすればねまる、武士は物事手取早にするものぞといふことが、武士道の金戒になつて居た。

是等はいづれも直きを好む性質が、大和民族の基本精髄を成して居る證據である。

―（新國文學史）―

二　建國歌

北原白秋

そのかみ、天つち闢けし始め、
げに萌えあがる葦禾なして、
立たしし神こそ
國の常立。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
かの若々し神の業を。

北原白秋　名は隆吉。明治十八年福岡縣に生る。詩人。

國の常立　國常立の神。神代七世の一神。

惟ふに、日靈の大御神の、
げに言因し給へる御詔、
知らせよ、皇孫、
三つの寶と。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
豐葦原の中つ國を。
（[illegible]）

日靈の大御神　大日靈貴神（オホヒルメムチノカミ）。天照大神のことを申す。

神武の御代こそ荒ぶる和し、
げに現つ神、宮太敷きて、
初めて築かせし、
國の礎。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
神ながらなる崇き道を。

爾にぞ、明治の大き帝、
げに晴れわたる青高空と、
更にし昭らさす、
四方に八隅に。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
わが彌榮の日いづる國を。

依り會ふ天地きはみ知らず、
げに天皇の御稜威盡きず、
誇れよ、國民、
われら榮あり、
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
たゞひたむきの日本魂を。

—(國民歌謠集)—

三　おらが春

小林一茶

一　おらが春

昔、丹後の國普甲寺といふところに、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は、世間は祝をしてさゞめけば、われもせんとて、大晦日の夜、ひとり使へる小法師に、手紙したゝめ渡して、あすの曉にしか〴〵せよと、きと言ひをしへて本堂に泊りにやりぬ。

小法師は、元日の旦、いまだ隅々は小暗きに、初雞の聲と同じく、がばと起きて、教のごとく表門を丁々と敲けば、内より「何處より」と問ふ時、「西方彌陀佛より、年始の使僧に候。」と答ふるよりとく、上人、はだしにて踊り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、きのふみづから認めし、か

小林一茶　通稱彌太郎。俳諧寺と號す。信濃の俳人。文政十年（一八四七）歿、年六十五。

普甲寺　京都府與謝郡の地名。

きと　「嚴しく」の意。

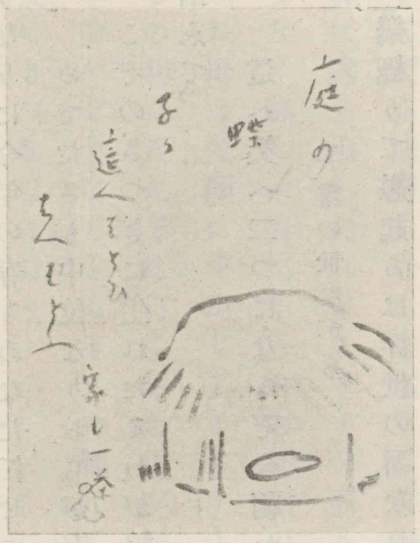
彌陀佛　阿彌陀佛、西方、極樂世界の淨土を主宰する佛。

の手紙をとりて、恭しく押し戴きて讀みて曰く、

それ世界は衆苦充滿に候間、とくわが國に來るべし。聖衆出迎へて待ち入り候。と讀みをはりて、おう〳〵と泣かれけるとかや。

この上人、みづから企みこしらへたる悲しみに、みづから嘆きつゝ、初春の淨衣をしぼりて、滴る涙を見て祝ふとは、ものに狂へる樣ながら、俗人に對して無常をのぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。

それとは些か變りて、おのれらは俗塵に埋もれて世渡る



挿繪　一茶筆蹟。
庭の蝶子が這へばとぶ
家も一茶

境涯ながら、鶴亀にたぐへての祝ひづくしも、厄拂ひの口上めきて空々しくおもほゆれば、から風の吹けば飛ぶ屑家は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになん迎へける。

めでたさも中位なりおらが春

こぞのさつきに生れたるわが娘に、一人前の雑煮の膳を据ゑて、

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

二露の世ながら

樂極りて愁起るは浮世の習なれど、いまだ樂半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛なるみどり子を、寐耳に水のおし來るごとき、あら〳〵しき痘の神に見込まれつつ、いま水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の、泥雨にしをれたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。これも二三日經たれば、痘はかせぐちにて、雪解けの峽、土のほろほろ落つるやうに、瘡蓋といふもの取るれば、祝ひ囃して、さんだら法師といふを作りて、笹湯浴びせる眞似かたして、神は送り出したれど、ます〳〵弱りて、昨日より今日は頼み少なく、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、この世をしぼみぬ。母は死顔にすがりて、よゝ〳〵と泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔いごとなどと、あきらめ顔しても、思ひきりがたきは恩愛のきづなりけり。

露の世は露の世ながらさりながら

―おらが春―

痘　天然痘。

さんだら法師　棧俵（サンダハラ）のこと。米俵の兩端にある圓くしてひらたき藁のふた。

神　疱瘡神。

四 旅人芭蕉

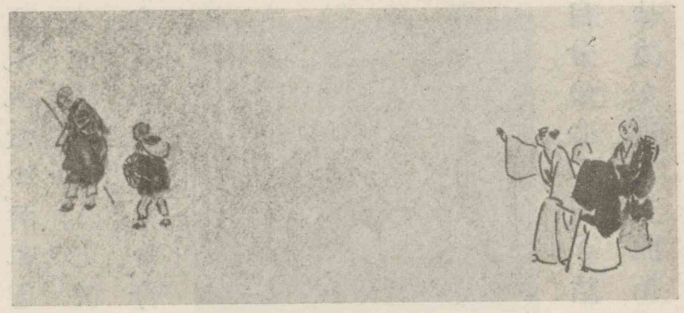
荻原井泉水

旅に出ると、外界の景色にのみ心が奪はれさうなものであるが、不思議な事には、それとは反對に自分の内部にある心の諸相が、はつきりと見つめられるのであつた。而して自分の踏んで來た生活の路筋が見渡されて、運命といふことなども考へられるのであつた。芭蕉は今更のやうに四十四年をすごして來た春秋を憶つた。幼き時から武門に出仕しながらも、勇しい事は好ましくなく、たゞ自然や人生のあはれさをじつと見つめて、涙ぐまれるやうな素質であつたのだが、主君蟬吟公が早世せられたのを動機として、人生をはかないもののやうに思ひ切つた心が、そのまゝ藝術の道にずる〳〵と引きこまれて、とう〳〵幼い時から好きな俳諧

荻原井泉水 名は藤吉。明治十七年東京市に生る。俳文・俳句研究家。

蟬吟公 藤堂良忠。伊賀上野の城代、藤堂良精の子。

に身も心もうち込むやうになつてしまつた。これが始からの因緣であつたのであらう。一時は俳諧を業として、大いに門戸を張らうと思つたこともある。然し、職業としようとすれば當世では相應に俗才が必要だ。それは自分のやうな世智に疎い者には、到底出來ることではなかつた。而して貧しい若い俳諧師として、米鹽の代にも困つた時などには、どうしてこんな俳諧などに身を入れる事にしたのだらうといふ自分の愚鈍さが、自分ながら可愛さうになる事もあつたし、又そんな時には自分の作品に自信が持てなくなつて、いつ



挿繪 蕪村筆、奥の細道繪卷(一)。

そ俳諧などをやめてしまはうと思つた事も、幾度あつたかもしれないけれども世間の俳諧といふものを見渡すと、餘りにそら〳〵しくて馬鹿々々しい、眞の俳諧は決してそんなものではない、今新しい旗を立てて、之が改造を叫ぶべきものは、自分の外にないではないかと思ひ當るにつけて、此の道の爲に自分と云ふ者が選ばれたのだといふ使命をしみ〴〵と感じて、戰場に立つやうな興奮を覺えた事も少なくはなかつた。兎も角も當時の俳諧といふものも、自分の心もゆき詰つてゐたのだ。それで思ひ切つて放擲しようか、進んで開拓しようかといふ追分に迷うてゐたのであつた。

挿繪　蕪村筆、奥の細道繪卷(二)。

丁度三十歳から三十六七歳までの間だつた。あの頃は隨分悶え苦しんだものだつた事が想ひ起される。氣を換へて祿を食む生活をしようかと思つて、幕吏になつたのもやはり其の頃であつた。けれども自分は一體吏員のやうな職に適する性格ではなかつた。それに自分の好んでゐる俳諧が、かうした場合には兎角誤解の種となつて、その爲に吏員生活も挫折せざるを得なくなつた。又その頃は大いに學問をして、自分の愚蒙を啓かなければならぬなどと考へて、讀書三昧に入らうとも試みたが、机に向つてもやはり自分の好む俳諧の書物の方を繙き勝ちになつたり、心がいつか書物から脱けだして句作の境に漂うてゐたりして、學問を勵む事さへやつぱりなし遂げられなかつた。

こんな風で自分はとう〳〵無才無學・無能無藝で、たつた

一筋この俳諧といふ路に引つぱられてゐるのだつた。俳諧と自分とは何といふ悪縁といふのであらうか、切らうと思つても切ることが出來ず、離れようとすれば、ます〳〵纏ひつかれてしまふ。然しそれだけ俳諧と自分とは、產れぬ先から繫がつてゐたやうな深い因緣を感ぜずにはゐられない。此の一筋の路が、自分の歩むべき本當の路であつたのだ。その路を拓く爲に自分はめし出されたのだといふ信念が、漸く四十歲を越えた頃から自分の心にはつきりと感じられて來た。而して和歌の道を踏んだ西行も、連歌の道を歩んだ宗祇も、繪畫の道を進んだ雪舟も、又茶の道を行つた利休も、其の道とその人といふものが、切つても切れぬ因緣に繫がれてゐたのに相違ない。其の道の爲に其の人が作り出されたのだともいへよう。其の人が出て始めて其の道が作られたのだともいへよう。さういふ意味で自分は西行の心や、宗祇の心をぴつたりと自分の心の中に感ずることが出來ると芭蕉は思つた。又和歌の道といひ、繪畫の道といひ、茶の道といひ、道はそれ〴〵に分れてゐるけれども、その道を貫く精神といふものは一つである。卽ち藝術の精神といふものは一つである。だから其の一つの道に徹底しさへすれば、他の道の心をも亦味はふことが出來るものだ。和歌も繪畫も、今までに自分が達しえた藝術觀から理解出來る。西行や利休とも手を携へて話すことが出來ると彼は思つた。それで俳諧の道といふものは風雅を主眼とする。風雅といふのは自然に從ふといふ事だ。

挿繪　芭蕉木像。

宗祇　飯尾氏。紀伊の人。連歌の大家。文龜二年（一一六二）歿、年八十二。

雪舟　本名は小田等楊。畫僧。備中の人。永正三年（一一一六六）寂、年八十七。

利休　千宗易。和泉の人。茶人。天正十九年（一一一五一）歿、年六十九。

自然に從ふから、春夏秋冬の推移が自分の呼吸とぴつたりと合ふことになる。花は自分を離れて外に咲いてゐるものではない、自分の心が機縁に逢つて開き、而して謝しさるのだ。月は自分を離れて外に照つてゐるものではない、自分の心が圓熟して澄み、時としては又曇るのだ。この自然を心とし、心を自然として生きるといふことが、一番人間らしい生活といふものだ。それは限ない愛を體感して、人間らしい自分の身の小ささを自然の大いさの中にいかすことだ。だから自分の心が、時として乾燥したり、疎漫になつたりして、自然の光や自然の美といふものを忘れるやうになつた時は、人間らしくないあはれなものに墮したのだとも云へる。夷狄や禽獸に近づいたのだとも云へる。詮じつめれば「自然に從ひ自然にかへれ。」といふ事だ。この心を心とすることが俳諧の道を歩むといふ事だ。風雅に遊ぶといふことだ。かうした確信をいよ〳〵はつきりと彼は掴みえた。而してこの確信を以て、彼は今たつた獨り長途の旅の路上にあつた。彼は少しも心細い事はなかつた。雨や風や寒さや、さうした大自然の嚴かさを身に受けるにつけても、そこに父の樣な犯しがたい威容の底に、默々として泌みでる恩愛を感ずるやうな心地がした。「自然に從ひ自然にかへれ。」そは旅人としてこそ最も痛切に體感せらるべき事でもあつた。

—〔旅人芭蕉〕—

此の道や行く人なしに秋の暮　芭蕉

年くれぬ笠着て草鞋はきながら　同

五　奥の細道

出　發

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日日旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまず。海濱にさすらひ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず。股引の破れをつゞり、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅にうつるに、

松尾芭蕉　俳諧正風の祖。伊賀に生る。元祿七年歿、年五十一。（一六四四―一三五四）

月日は云々　李白の文に、「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客」

去年　元祿元年。

江上の破屋　隅田川のほとり（江上）なる深川の芭蕉庵。

白河の關　福島縣磐城郡白河の附近にありし關。

杉風　芭蕉の門人。本名は鯉屋藤左衞門。

別墅　江戸深川六間堀。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峯かすかに見えて、上野・谷中の花の梢又いつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、船に乘りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思、胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

是を矢立の初として、行く道なほすゝまず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

上野・谷中　東京市下谷區。

千住　東京の北東口。今の東京市足立區。

矢立の初　矢立の筆の使ひ初。

今年元祿二とせにや奥羽長途の行脚、唯かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮のうらみを重ぬといへども、耳にふれて いまだ目に見ぬ境若し生きて歸らばと定めなき賴みの末をかけ、其の日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。痩骨の肩にかゝれる物先づくるしむ。唯身すがらにといで立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさりがたき餞などしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

白河の關

心許なき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。「いかで都へ」と便求めしも理なり。中にもこの關は風騷の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の

今年元祿二とせ　元祿二年三月二十七日。

吳天云々　旅のつらさを嘆じたる意。白樂天の詩「今年九月來ニ吳鄉ニ兩邊蓬鬢一時白。」

詩人玉屑、聞僧可士送レ僧詩「笠重吳天雪、鞋香楚地花。」等に據るか。

草加　埼玉縣北足立郡草加町。奥州街道の一驛。

紙子　紙製の衣服。

さりがたき餞　ことわり難き送別の贈物。

白河の關　前に註す。

いかで都へ云々　「たよりあらばいかで都へつげやらんけふ白河の關は越えぬと」（拾遺集）

稍なほあはれなり。卯の花の白妙に茨の花の咲きそひて雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津嶺高く、右に岩城・相馬・三春の莊、常陸・下野の地をさかひて、山つらなる。かげ沼といふ所を行くに、けふは空くもりて物影うつらず。須賀川の驛に等躬といふ者を尋ねて、四五日とゞめらる。まづ白河の關いかに越えつるやと問はる。長途の苦み身心疲れ、かつは風景に魂をうばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌

清輔　藤原氏。二條天皇の御代の歌人。治承元年（一八三七）歿す。

曾良　河合惣五郎。芭蕉の門人。寶永六年歿す。年六十二。（一六六九―一六九三）

阿武隈川　奥羽地方の東南部を流る。

會津嶺　福島縣岩代國磐梯山。

岩城　磐城國。宮城・福島の二縣に跨がる。

相馬　福島縣相馬郡。

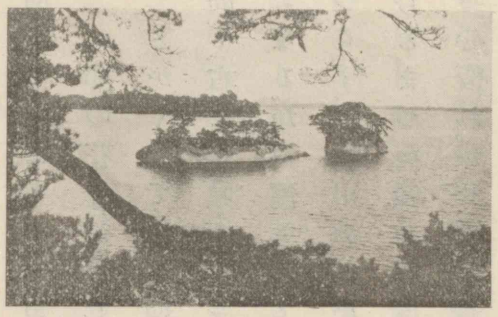
三春莊　福島縣田村郡三春町。

須賀川の驛　福島縣岩瀨郡。

等躬　名は相樂伊左衞門。芭蕉の門人。

松島

船をかりて松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯に着く。抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡くして、敧つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり三重に疊みて、左に別れ右に連なる。負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃やかに、枝葉汐風に吹撓められて、屈曲自ら矯めたるがいづれの人か筆を揮ひ詞を盡くさん。



如し。千早振る神代の昔、大山祇のなせる業にや。造化の天工、

松島　宮城縣宮城郡。
雄島　松島瑞巌寺の山門を出でて右に見ゆる大いなる島。
洞庭　支那湖南省岳州にある湖。
西湖　湖南省懷德府永順縣にあり。
浙江　支那三江の一。浙江省の東北の灣。
千早振る「神」の枕詞。
大山祇　山を司る神。
挿繪　松島。

雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落葉・松かさなど打煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懷かしく立寄る程に、月海に映りて、晝の眺めまた改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

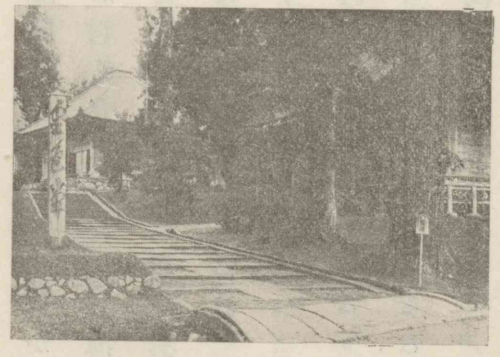
余は口をとぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別るゝ時、素堂松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解いて今宵の友とす。かつ杉風・濁子が發句あり。

平泉

十二日、平泉へと心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞傳

雲居禪師　京都妙心寺の僧。寛永十三年伊達忠宗に聘せられて瑞巌寺の中興となる。萬治二年寂す。年七十八。（一二二四二—二三一九）
素堂　山口信章。芭蕉の友人。享保元年歿、年七十五（一三〇二—一三七六）
原安適　醫師。芭蕉の友人。
杉風　第三八頁參照。（一三一〇—一三九二）
濁子　芭蕉の門人。
平泉　岩手縣西磐井郡平泉村。
あねはの松　宮城縣栗原郡澤邊村にありきと。
緒だえの橋　宮城縣志田郡古川町にある小板橋。

へて、人跡稀に、雉兎・芻蕘の往きかふ道、そこともわかず、終に路ふみたがへて石の卷といふ湊に出づ。「こがね花咲く。」とよみて奉りたる金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江につどひ、人家地を爭ひて竈の煙立ちつづきたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸くまどしき小屋に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道まよひ行く。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのの萱はらなどよそ目に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふところに一宿して、平泉に至る。其の間二十餘里ほどと覺ゆ。



雉兎・芻蕘　雉や兎を狩る獵師と、牧草や薪を採る童。孟子、梁惠王下、「文王之囿方七十里、芻蕘者往焉、雉兎者往焉。」

石の卷　宮城縣牡鹿郡にある港。

こがね花咲く　「すめらぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山にこがね花さく」（萬葉集）

金華山　宮城縣牡鹿半島の東南端に聳ゆる小島。

挿繪　光堂

袖のわたり　宮城縣桃生郡橋浦村。

尾ぶちの牧　牡鹿郡稻生村。

まのの萱はら　同、眞野村。

戸伊摩　宮城縣登米郡登米町。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成りて、金雞山のみ形を殘す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさしかため、夷をふせぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛のく

三代　藤原清衡・基衡・秀衡。

金雞山　高館の西南。

高館　平泉驛の北約七百米一に衣川館。義經の居館。

北上川　奥羽地方の東部を南流す。

衣川　岩手縣膽澤郡衣川村より發す。

和泉が城　和泉三郎忠衡（秀衡の三男）の居城。

泰衡　秀衡の次男。

國破れて云々　杜甫の詩に「國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。」

兼房　增尾十郎兼房。義經の臣。年六十餘、白髮を亂して奮戰して死す。

さむらとなるべきを、四面新たにかこみて甍を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千載の記念とはなれり。

さみだれの降り殘してや光堂

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよしを人々の勸むるによりて、尾花澤よりとつて返す。其の間七里ばかりなり。日未だ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖をかさねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてん・はやぶさなどいふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稻つみたるをやいな舟とはいふならし。白絲の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水漲りて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

—（奥の細道）—

四面新たに　鞘堂ないふ。正應元年、鎌倉將軍惟康親王、金色堂に鞘室を造らしむ。

立石寺　山形縣東村山郡山寺村にあり（挿繪）。

慈覺大師　名は圓仁。天台第二の座主。貞觀六年寂、年七十一。（一四五四一五二四）

尾花澤　北村山郡の町。

最上川　吾妻嶽より發して酒田港に注ぐ。

ごてん　御殿林。山形縣東田川郡にあり。

はやぶさ　隼の瀨。東村山郡鹽川の北六粁にあり。

板敷山　山形縣最上・東田川の郡界をなす。

酒田の海　山形縣飽海郡酒田港。

いな舟　稻を積んだ小舟。「最上川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり」（古今集、東歌）

仙人堂　最上郡古口村にあり。義經の臣常陸坊を祀ると。

奥の細道　一卷。芭蕉が弟子曾良を伴なひ、元祿二年三月江戸の假寓を發し、東北をめぐり、越後・越中・美濃・伊勢に至るまでの二千四百粁程百五十日間の紀行。

六　七寶の柱

泉鏡花

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。

大きな廣い本堂に、一體見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何もない。それが莊嚴であつた。

日の光が幽かに漏れた。

裏門の方へ出ようとする傍に、寺の廚があつて、其處で巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、はじめ藥師堂、次に寶物庫、さて金色堂、所謂光堂。續いて經藏。辨財天と言ふ順序である。皆、參詣の人を待つてはじめて扉を開く。すぐ又あとを鎖すのである。が、寶物庫には番人が居て、經藏には、年の若い出家が、火の氣もなしに一人經机に對つて居た。

泉鏡花　名は鏡太郎、明治六年金澤市に生る。小説家。

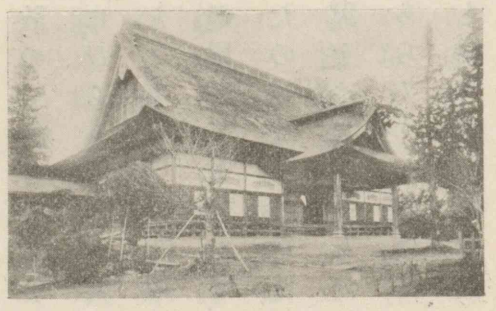
中尊寺　岩手縣西磐井郡平泉にあり。藤原清衡の創立。

金色堂　境内の北方にあり。中尊寺の本堂。

經藏　金色堂の西北にあり。

はじめ藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、この番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、かつ芝生に散つて敷いたやうであつた。

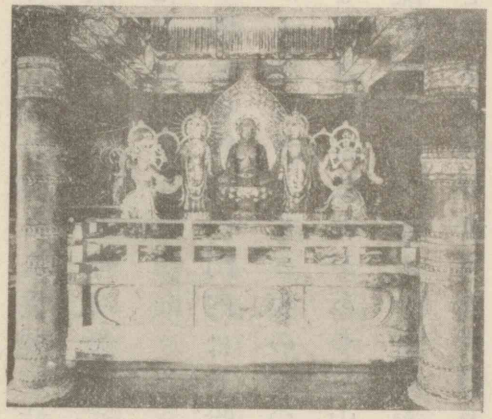
櫻は中尊寺の門内にも咲いて居た。麓から上らうとする坂の下の取附の處にも一本見事なのがあつて、山中心得の條條を記した禁札と一所に、たしか「淺黄櫻」と云ふ札が建つて居た。けれどもそれのみには限らない。處々汽車の窓から視た櫻は、奥が暗くなるに從つて、ぽつと冴えを見せて咲いたのはなかつた。薄墨、鬱金、また其の淺黄と言つたやうな、どの櫻も、皆ぽつとりとし



挿繪　中尊寺本堂。

て曇つて、暗い紫を帶びて居た。雲が黑かつたためかも知れない。

唯階の前の花片が、折からの冷たい風にぱら〳〵と誘はれて、さつと散つて、此の光堂の中を空ざまに、ひらりと紫に舞ふかと思ふと――羽目に浮彫りした孔雀の尾に玉を刻んで、綠青に錆びたのがなほ嚴かに美しい、其の翼をぱら〳〵とたたいて――ちら〳〵と床にこぼれかゝる。と宙で、黃金の卷柱の光をうけて、ぱつと金色に飜るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を瞠つた。



挿繪　光堂內部須彌壇。

床も、承塵も、柱も固より、彳めるものの踏む處は黑漆の落ちた黃金である。黃金の剝げた黑漆とは思はれない。しかも些のけば〳〵しい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。われら仙骨を持たない身も、此の雲は且踏んでも破れぬ。其の雲を透して、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しき虹を其のまゝ柱にして畫かれたる十二光佛の微妙なる種々相は、一つ〳〵錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中にあらはれて、淸く明かに、而も幽かなる幻である。其の十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流るゝが如く輝かして、寶相華・勝曼華が透間なく咲きめぐつて居る。

此の柱が須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は四座あつて、壇上には彌陀・觀音・勢至の三尊、二天・六

十二光佛　阿彌陀佛をその光明の德について名づけたる十二の佛名。
咲きめぐつて　寶相華・勝曼華の裝飾の美しさ。
須彌壇　寺院の中央に備へ、佛像又は厨子を安置する壇。
彌陀三尊　阿彌陀如來を中にして、觀音・勢至の二菩薩を左右の脇士とす。
二天　帝釋天と梵天。

地藏尊が安置され、壇の中は、眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、此に各〻一口の劍を抱き、鎭守府將軍の印を帶び、錦袍に包まれた三つの屍がまだ其のまゝに横たはつて居るさうである。

雛芥子の紅は、美人の屍より開いたと聞く。光堂は、こゝに三箇の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで辭して、天界一叢の雲を下りた。階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巢がかゝつて、風に輕く吹かれながらきら〳〵と輝くのを、不思議なる塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。また彌が上に懷かしい。

六地藏　六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）の衆生を化導せんが爲に、身を六體に別てる地藏菩薩。

六界一叢の云々　金色堂から立ち出でしことない。

挿繪　中尊寺經藏。

羽目には、天女――迦陵頻伽が髣髴として舞ひつゝ、かなでつゝ浮出て居る。影をうけた束・貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿である。

漆塗、金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた青い毛の分厚な横顏が視られるのが、づづつと足を擧げさうな構である。右に此の轡を取つて、一寸振向いて、菩薩にものを言ひさうなのが優闐王、左に一匣を捧げたのは善財童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうに杖ついて立つ。額も、目も、眉も、其のいづれもにこ〳〵として、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふ、獅子が。

此の須彌壇を左に、一架を高く設けて、こゝに紺紙金泥の

迦陵頻伽　極樂に在つて美音で鳴くといふ鳥。

文殊師利　文殊菩薩。

優闐王　憍賞彌國の王。釋迦に歸依す。西紀前五世紀の人。

善財童子　菩薩の名。生れたる時、宅內に自然に種種の財寶湧き出てしといふ。

淨名居士　維摩詰（ユキマキッ）。釋迦と同時の人。

佛陀波利　龍樹菩薩の弟子。傳不詳。

一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥・銀泥で本經の圖解を描く。清麗巧緻にして、且神祕である。

今こゝに來て此の經を視ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧ぐるが如く、此は月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に、色の青白い、痩せた墨染の若い出家が一人居たのである。私の一禮に答へて、

「ご緩り、ご覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく堂の內壁に廻らした八つの棚に滿ちて、二代基衡の此の一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書きの一切經、並に判官贔屓の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した黃紙宋板の一切經が、みな黑燿の珠玉の如く漆の架に滿ちて居る。——一切經の全部量は、七駄片馬と稱するのである。

毛越寺　同じく平泉にあり。二代基衡の建立。

一切經　佛敎の經・律・論の三門を悉く記したるもの。

判官　義經のこと。

「——拜見をいたしました。」

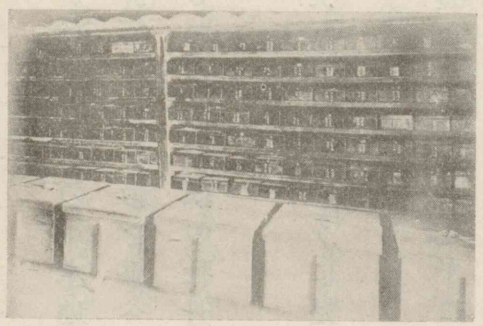
「はい。」と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、卷袖で、寒く細りと草を行く。淸らかな僧であつた。

「辨天堂を案內いたします。」と車夫が言つた。

向うを墨染で一人行く若僧の姿が、寂しく、而も何となく尊く、正にまさしく彼處におはする……天女の御前へ、我等を導く、つゝましく謙讓なる一個のお取次のやうに見えた。

經堂を出た。

今は眞晝ながら、月光に醉ひ、桂の香に卷かれた心地がして、亂れたまゝの道芝を行くのが、靑く淸明なる圓い床を通



挿繪　經藏の內部。

るやうであつた。

階の下に立つて仰ぐと、典雅優麗なる辨財天の金字に緣して、牡丹花の額がかゝる。

いかにや、年ふる雨露に彩色のかすかに成つたのが、木地の胡粉を却つてゆかしく顯はして、萌黃に群青の影を添へ、葉をかさねて、白綠碧藍の花をいだく。さながら瑠璃の牡丹である。

ふと高緣の雨落に、同じ花が二三輪咲いて居るやうに見えた。

扉が、ぎいぎり〳〵と——僧の姿は裏に隱れて見えずに開く。

眞白き面影、天女の姿は、すぐ其處にあらはれ、蜀紅の錦といふ天蓋も廣くかゝつて、眞黑き御髮の寶釵の玉一つをも

遮らない御面影の妙なること、御目ざしの美しさ、……申さんは恐れ多い。たゞ西の方遙かに山城國淨瑠璃寺、吉祥天のお寫眞に似させ給ふ。白理・優婉・明麗なる、十八九ばかりの、ほぼ人だけの坐像である。

と、手をついて對したが、見上ぐる瞳に、御頰のあたりかすかに、いまにも莞爾とあそばしさうで、まざ〳〵とは拜めない。

さて壇を退きざまに、僧のとざす扉につれて、畏くもおんなごりさへ惜しまれまゐらすやうで、涙ぐましく又額を仰いだ。御堂其のまゝ、私は碧瑠璃の牡丹花の裡に入つて、又牡丹花の裡から出たやうであつた。

花の影が、大きな蝶のやうに草に映じた。

下向の時、あらためて見晴しの四阿に立つた。

淨瑠璃寺　京都府相樂郡當尾村。法雲院と號す。

吉祥天　佛敎に於ける天女の一。

伊勢・龜井・片岡・鷲尾、四天王の松は、畑中、畝の四處に雲を鎧ひ、搖絲の風を浴びつゝ、或者は蕭々として衣川に枝を聳かし、或者は戀々として高館に梢を伏せたのが、彫像の如くに眺められる。

其の高館の址を靜かにめぐつて、北上川の水ははるゞ〳〵、瀨もなく、音もなく、雲の果てさへ見えず、たゞ「はるゞ〳〵」と言ふやうに流れるのである。

—（鏡花全集）—

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方、二丁ばかりわけ入るほど、柴人の通ふ道のみはつかに有りて、さかしき谷をへだてたる、いと尊し。彼の「とく〳〵の清水」はむかしに變らずと見えて、今もとく〳〵と雫おちけり。

露とく〳〵試みに浮世すゝがばや。（野ざらし紀行）

四天王　義經の四天王。伊勢三郎・龜井六郎・片岡八郎・鷲尾七郎。

とく〳〵清水の　西行法師の詠に「とく〳〵と落つる岩間の苔清水くみほす程もなき住居から」

野ざらし紀行　一卷。芭蕉の紀行。

七　自然詩人

土居光知

最初の自然詩人は誰であるかと尋ねたならば、多くは山部赤人と答へるであらう。西行や芭蕉も赤人を祖としてゐる。しからば赤人の自然に對する愛はいかなるものであつたらうか。赤人の歌をよんで特に注意されることは「瀨の音ぞ清き」「清き白濱」等、清きといふ語が續出することである。彼が愛したのは清淨な自然である。

田子の浦ゆ打ち出でて見れば眞白にぞ
富士の高根に雪は降りける

の歌に於て、彼が讃美したのも清淨の神々しさであつて、今日の登山家がよろこぶやうな偉大なる力の感じを中心にした山岳美ではなかつた。彼が自然の清淨さを讃美した裏

土居光知　高知縣の人。明治十九年生る。英文學者。東北帝國大學教授。

山部赤人　柿本人麿と共に歌聖と稱せらる。聖武天皇の神龜・天平時代の人。

面には、人生の汚濁さを厭惡する心があつたであらう。當時、奈良の社會はすでに寵臣が權を專らにし、風俗が糜爛し始めてゐた。彼の祖先は顯宗・仁賢の二帝を奉戴した伊與來目小楯であるらしく、山部の姓が示す如く、世々山林官であつたとすれば、自然に親しむ性情を遺傳して來たのであらう。また「赤き心」等に於ける「赤き」と「清き」とは古代語として同じ意味を有したことを考へると、赤人の名にも清淨を慕ふ心が察せられるではあるまいか。そして奈良の都會生活を見ると既に腐敗し、彼をして面をそむけしむるものがあつた。そこで彼は清淨なるものを慕ひ、自然のうちに放浪した。彼以前の自然の歌は、人生の裝飾或は背景としての自然、官能的に快感を與へる自然の歌であつた。赤人が始めて清き自然を汚れたる人生に對立するものとして、精神的に自然を

顯宗　第二十三代の天皇。
仁賢　第二十四代の天皇。

愛したのである。彼が西行及び芭蕉の先達となり、最初の自然詩人とせられるのは、彼が精神的な自然の發見者であるからである。かくて彼の自然の歌は、曾てなき清新・幽玄なるものとなつた。二三の例を示せば

烏羽玉の夜のふけゆけば楸生ふる
清き河原に千鳥しばなく

吾が背子に見せんと思ひし梅の花
それとも見えずゆきの降れば

春の野に菫つみにと來し我ぞ
野をなつかしみ一夜ねにける

西行は友を想ふ心をそのまゝに移して自然を愛した。彼が世をのがれた所緣は友人を失つた悲しみか、その他の理由かは知らぬが、しかしかゝる心は彼の自然に對する心持

西行　俗稱佐藤義清。歌僧。鳥羽上皇に仕へしが、後出家して、建久元年（一八五〇）寂、年七十三。

のうちにも感じられる。

吉野山梢の花を見し日より
心は身にもそはずなりにき

ながむとて花にもいたくなれぬれば
散るわかれこそ悲しかりけれ

花をまつ心こそなほ昔なれ
春には疎くなりにしものを

獨すむ片山かげの友なれや
嵐にはるゝ冬の夜の月

彼は自然を友として、愛すれば愛するほどさびしくなつた。そして淋しき心に調和する淋しき自然を友として交はらんとした。

心なき身にもあはれは知られけり

鳴たつ澤の秋の夕暮
おぼつかな秋はいかなる故のあれば
すゞろに物の悲しかるらむ

何となく住ままほしくぞ思ほゆる
鹿のね絶えぬ秋の山里

訪ふ人も思ひたえたる山里の
寂しさなくば住みうからまし

かく彼は寂しさを友としてその奥深くたどつて行つたのであるが、寂しさの奥には尙深刻な寂しさがあるのみで、愛の眞の歡は見出されなかつた。

雪なれば野路も山路も埋もれて
遠近知らぬ旅の空かな

行く方なく月に心の澄み澄みて

果はいかにかならんとすらむ
風冴えて寄すればやがて氷りつゝ
かへる波なき志賀の辛崎
いづくにか眠り眠りて倒れ臥さんと
思ふ悲しき道芝のつゆ
秋ふかみ弱るは蟲の聲のみか
聞く我とてもたのみやはある
大波にひかれ出でたる心地して
助け舟なき沖にゆらるゝ

かくの如く西行は寂しさの奥へ奥へとたどつて行つたが、これは輝く光明の道ではなかつた。それは當時の時代思潮において人間性の愛と自然の愛とは相對立するものであつて、自然の愛は心情の願の否定であつたからである。西

行はこの寂しさにたへかねて、また「人」をなつかしく思つた。

淋しさにたへたる人はまたもあれな
庵並べん冬の山里

花も枯れ紅葉も散りぬ山里は
淋しさをまた訪ふ人もがな

かへりゆく人の心を思ふにも
離れがたきは都なりけり

しかし當時の厭世觀のうちに育ち、それを超越することの出來なかつた彼は、人間の愛に歸つてゆくことが出來なかつた。

わだの原遙に波をへだて來て
都に出でし月を見るかな

吉野山やがて出でじとおもふ身も

花散りなばと人やまつらむ

かくて彼はまばゆき光明にも、大なる歡喜にも、力強い信仰にも接することなく、未來に對する淡い希望と、自然の寂しい慰藉とのうちに生を終へたのである。

入日さす山のあなたは知らねども
心はかねて送り置きつる

諸共に我をも具して散りね花
うき世を厭ふ心ある身ぞ

願はくは花の下にて春死なむ
そのきさらぎの望月の頃

西行の偉大なる點は、厭世脫俗の態度を誇示し瘠我慢をすることなく、かゝる自然の心によつて慰められずして、「人間」を慕ひ何物をか眞に愛しなければゐられなかつた點に、心の奥底から寂しがつた點にある。これは安價な愛なきさとりに安住し、寂しさをもてあそび、茶化したり、洒落でごまかしたりする人達とは比較にならぬ。さびしがるといふことは愛せずにはゐられない詩人の運命である。要するに西行の自然の愛は赤人が歌つた如き清淨なる自然としての愛と、人間愛とが合一されたものであつたと云ふことができよう。

—（文學序說）—

わが國古來詩人多しと雖も、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後唯僅かに三人。西行・宗祇・芭蕉これなり。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。

（藤岡作太郎—國文學全史）

八　自然の愛

藤岡作太郎

國民の特性は、初より其の人種に固有なるものありといへども、またその住處の地勢・氣候によりて馴致せられ、變化したるもの少なからず。そのもと同じき印度歐羅巴種族が、東洋に西洋に相分れて、寛猛柔剛匹(たぐひ)を異にする種々の國民となりたるは、南國の日、北地の嵐、山海さまゞの風物が之を養ひたるなり。日本國民が全一體として能く統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接する國なき、その地位に影響せられしこと少なからざるべし。さらば我が國民の特性を論ずるに當りては、日本の自然についても觀察を下さざるべからず。

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲に於けるイタ

藤岡作太郎　東圃と號す。石川縣の人。國文學者。文學博士。東京帝國大學助教授。明治四十三年歿、年四十一。

印度歐羅巴種族　主として言語によつて分類した種類の名。東は印度から西は歐洲にわたる主なる諸民族(米國人を含む)の總稱。

リー・スキスの如し。氣候中和、山水明媚、瘴烟・毒霧の襲ふことなく、猛獸・毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流數百里の山野を浸すを見ず、雄大瑰偉なる大陸的風致に乏しといへども、到る處優麗嫻雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし富士を後にして、長汀曲浦涙靜かに砂滑かなり。瀨戸内海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日夕日に移ろふ景趣は應接に暇あらず。晩秋菊あり、陽春櫻あ

挿繪　長汀曲浦。

り、初夏の梢にかゝれる藤浪は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、季冬の森、鵯の聲暗き蔭に、紅の椿は拾ふ兒なしに切りに落つ。美なるかな山河、此に接するものは、怒れる心も和ぎ、結べる思も解けて、愛賞に他事なからざるを得ず。山川は優美なり、穩和なり。之に馴れ之を愛する國民が、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、卽ち自然の感化が致す所なるべし。日本の土地は孔雀を生ぜずして雉子を產す。國民の性も亦、孔雀の姿の如く濃艶ならずして雉子の如く淡泊なり。悲憤の情、時には火の如く燃ゆることありといへども、概するに、禀質猛烈ならずして穩健に、執着せずして洒脫なるも、また外圍の風物が、漸次に養ひ來れるものならんか。

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豐饒にして、河海に魚

貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美穩和なる山川は、常に瞼上に愛を湛ふる如し。接するものは之に親しみ親しむものは之を慕ふ。愛に迎へらるゝものは、愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、その一木一草をなつかしむは、自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には食品も玩具も數ふるに足らず、露を帶びたる植木の葉の翠花の紅こそ、カンテラの光に映えて水々しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買ひ求めて、座敷に飾り庭に植ゑ込む。裏長屋の道具の

挿繪　夏の夜の蟲賣。

カンテラ　ポルトガル語。提燈。燭臺。

据ゑ處もなき窓前にも、稗蒔を作りて田舍の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育ててやさしき野趣を嬉しむ。長火鉢のわきの福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる葱草は風鈴の音と共に冷し。上下貴賤を通じて、自然を愛することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は、母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず、自然の愛すべきを見て、恐るべきを思はず。野をも垣をも吹き亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峰も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も深雪といへばみやびやかなり。荒き猪も臥猪の床と唱ふるにやさしく聞ゆなど、兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を説明せるなり。雨といへば、照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の降りも十日の照より飽き飽きするに、卯の花くだし、時雨など、いづ

葱草

二百十日の云々　「二百十日のあらし」と「野分」とは異なるものなれど、此の文では、同類と見たるなり。

荒き猪も云々　徒然草に「和歌こそなほをかしきものなれ。あやしの賤山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、恐しきぬのしゝも、ふすゐの床といへばやさしくなりぬ」と。

れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表るゝのみならず、その名を借りて屢〻人事に用う。すでに文學には源氏物語の名に、夕顔・末摘花・葵・榊・朝顔・胡蝶・螢・常夏・藤袴・若菜・柏木・鈴蟲・紅梅等あり、我等は又日常の用品にも、自然より出でたる名を用う。菓子に鶯餅・櫻餅・柏餅・萩の餅・紅梅燒・時雨など枚擧するに遑あらず。今の煙草にも福壽草・白梅・皐月・あやめ・萩等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。かくの如き類例は指を屈するに從つて思ひ出づべく、いづれも國民が自然の昵愛を示すものにあらざるはなし。

我が國民は、自然を愛賞する餘、又能く之を尊重せり。尊重するものには悅んで服從す。彼等は漫に人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。此の服從を以て屈伏といふこ

源氏物語　五十四帖。紫式部の作れる小説。一條天皇の御時（一六四六―一六七一）に成る。

と勿れ。悅服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは、不平なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悅服するものは從順なる兒孫が寬仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花を愛する趣味のいかに我等の西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峰に渡り川に沿ひて雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は、葉も枝もそのまゝに願はくは之に置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて、歡興を助くるに、一は床上の盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なることを賞すること、恰も油畫と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチューリップ・ヒアシンスなど其の葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼には毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、その花に何の美はしき處かある。されどあるかなきかの黃花を捧げて、なほなよ〳〵と下蔭の蟲の音にもゆらぐ樣、ますほの色はやがて白くほゝけて、霧に濡れ風に靡く趣は、我等が胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり。直ちに自然の懷にわけ入つて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

—(國文學史講話)—

ヒアシンス

ますほの色　すゝき(薄)の赤みがかりたるをいふ。

九　折節のうつりかはり

吉田兼好

折ふしの移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。

「物のあはれは秋こそまされ。」と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣ねの草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬づにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のことも立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

吉田兼好　卜部氏。歌文を能くす。正平五年歿、年六十八。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂りゆく程こそ、世のあはれも、人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鷄の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顏の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じこと、また今更にいはじとにもあらず、おぼしき事いはぬは腹ふくるゝ業なれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、掻いやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

灌佛の頃　佛生會。四月八日。
祭の頃　賀茂の祭。四月中の酉の日。
源氏物語　紫式部の作れる小說。
枕草子　清少納言の隨筆。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。

年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。

すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそ、おもしろけれ。

つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たゝきはしりありきて、何事にかあらむ、ことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが曉方より流石に音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。

亡き人の來る夜とて、魂祭るわざはこの頃都にはなきを、あづまの方には、なほすることにてありしこそあはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

—（徒　然　草）—

御佛名　十二月十九日から三日間宮中に行はるゝ佛事。六根の罪を消滅さする爲である。

荷前の使　毎年諸國より奉る貢穀の荷の初穂を諸陵に獻ずる。その使を荷前の使といふ。十二月中の吉日を選んで遣はされる。

徒然草から受けた影響の一つと思はるゝものに自分の俳諧に對する興味と理解の起原があるやうに思ふ。この本の所々に現れる自然界と人間の交渉、例へば第十九段に四季の景物を列記したのでも、それが枕草子とどれだけ似てゐるとか、ちがふとかいふことはさて措いて、その中には多分の俳諧がある。　—（吉村冬彦）—

徒然草　二卷。兼好法師の著。我が國隨筆の代表的名作。

吉村冬彦　本名寺田寅彦、東京の人。物理學者、理學博士。昭和十年歿、年五十八。

一〇 流泉・啄木

今は昔、源博雅といふ人ありけり。延喜の御子兵部卿親王の子なり。よろづのことやんごとなかりける中にも、管絃の道になむ極みたりける。琵琶をも微妙に彈きけり。笛をもえもいはず吹きけり。この人村上の御時に殿上人にてありけり。

その時に逢坂の關に一人の盲、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雜色にてなむありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を彈き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に彈く。

然る間、この博雅この道を強ちに好みて求めけるに、かの

源博雅 琵琶の名手。克明親王の長子。博雅三位と稱す。天元三年歿、年六十二。(一五七九—一六四〇)

延喜の御子 醍醐天皇の皇子。

兵部卿の親王 克明親王。

村上 第六十二代村上天皇。

逢坂 大津市の南。京都府と滋賀縣との界にあり。

敦實 宇多天皇の第八皇子。宇多源氏の祖。康保四年歿、年七十一。(一五五七—一六二七)

逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人をもて内々に蟬丸にいはせけるやう、「など思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし。」と。盲これを聞きて、その答をばせずして曰く、

よの中はとてもかくても過してむ宮も藁屋もはてしなければ

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくく覺えて思ふやう、我强ちにこの道を好むにより て、必ずこの盲に會はむと思ふ心深く、それに盲、命あらむこともし測り難し、また我も命を知らず、琵琶に流泉・啄木といふ曲あり、これは世に絶えぬべきことなり、唯この盲のみこそこれを知りたるなれ、かまへてこれが彈くを聞かむと思ひ

て、夜かの逢坂の關に行きにけり。

されども蟬丸その曲を彈くことなかりければ、その後三年の間、夜な〳〵逢坂の盲が庵の邊りに行きて、その曲を今や彈く今や彈くと密かに立聞きけれども、更に彈かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはかげりて、風少し打吹きたりけるに、博雅あはれ今宵は興あり、逢坂の盲、今夜こそ流泉・啄木は彈くらめと思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲、琵琶を搔鳴らして、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲、獨り心を遣りて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世を過すとて

とて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと限りなし。盲、獨言に曰く、「あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすきものや世にあらむ。今夜心得たらむ人の來よかし。物語せむ。」といふを、博雅聞きて聲を出して、「王城に在る博雅といふ者こそこれに來たれ。」といひければ、盲の曰く、「かく申すは誰にかおはします。」と。博雅の曰く、「我はしかじかの人なり。强ちにこの道を好むによりて、この三年この庵の邊りに來つるに、幸に今宵汝に會ひぬ。」と。盲これを聞きて喜ぶ。

その時に博雅も喜びながら庵の內に入りて、かたみに物語などして、博雅、「流泉・啄木の手を聽かむ。」といふ。盲、「故宮はかくなむ彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、唯口傳をもてこれを習ひて、かへすがへす喜びて、曉に歸りけり。

これを思ふに、諸の道は唯かくの如く好むべきなり。それに近代はげに然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸卑しきものなりと雖も、年頃宮の彈き給へる琵琶を聽きて、かく極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりにければ逢坂にはゐたるなりけり。

それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなむ語り傳へたるとや。

―（今昔物語）―

今昔物語 三十一卷。宇治大納言物語ともいふ。源隆國の著なり。天竺・震旦・本朝の小話を收錄せるものにて、毎篇の始を「今は昔」の語にて筆を起せり。

二 今様

慈鎭和尙

一、四季

春のやよひのあけぼのに、四方の山邊を見わたせば、
花ざかりかも白雲の、かゝらぬ峰こそなかりけれ。

花たちばなも匂ふなり、軒のあやめもかをるなり、
夕暮ざまのさみだれに、山ほとゝぎす名告りして。

秋のはじめになりぬれば、今年も半ばは過ぎにけり。
わが世ふけゆく月かげの、かたぶく見るこそ哀なれ。

冬の夜寒の朝ぼらけ、契りし山路は雪ふかし。

慈鎭和尙 關白藤原忠通の子。天台宗の大僧正。嘉祿元年（一八八五）寂、年七十一。

心のあとはつかねども、　思ひやるこそあはれなれ。

二、蓬萊山　　讀人しらず

蓬萊山には、千歳ふる、　萬歳千秋かさなれり。
松の枝には鶴巣くひ、　巖のそばには龜遊ぶ。

三、古き都　　藤原實定

古き都を來て見れば、　淺茅が原とぞあれにける。
月の光はくまなくて、　秋風のみぞ身にはしむ。

そば（稜）

古き都　京都のこと。當時、都は福原に遷れり。

藤原實定　後德大寺左大將。歌人。右大臣公能の子。建久二年（一八五一）歿、年五十三。

三　平安朝時代の郊外

佐々政一

平安朝は奈良朝文化の後を受けて、我が國の歷史上に燦然たる文明の光彩を放つた時代である。後世の制度文物は、實に多く其の範を此所に得て居つたのである。併し如何に文明が進んだといつても、交通といふことに就いては、上代よりは道路も完全し、種々の方法も講ぜられたであらうが、決してまだ今日のやうなものでは無かつた。自分の住宅から三里も四里も遠い處に、事務所や店を置いて、朝夕三十分か一時間で電車に乘つて通ふなどといふ事は、其の時代の人々の夢想だもしなかつたことである。此の時代は、別して乘物などといふものは牛車か馬の背を利用した位のもので、それも殆ど上流社會の人に限られて居て、下層民は唯定

佐々政一　醒雪と號す。京都の人。文學博士。東京高等師範學校教授。大正六年歿、年四十六。

まつた自分の仕事を毎日こつ〳〵と爲て居さへすればよかつたのである。從つて其の時分は、現代の郊外生活といふやうな事は、殆どなかつたと言つてもよい位であつた。

此の時代の郊外といへば、まづ主として嵯峨野や河東白河邊を指すのが適當であらうと思ふ。當時この邊は、住宅地といふよりは、寧ろ遊歩場であつた。和歌にも詠まれたやうに、正月の子の日には、此の邊で小松引といふやうなことが盛んに行はれた。それは京都の公家達や其の他上流の人々が、郊外に出掛けて行つて、小さな木を引き拔いて遊んだのである。小松引といつても、必ずしも小松ばかりでは無かつた。何でも其の近邊に生えて居る小さな木であればよかつたのである。そして、それを家に持つて歸つて、前栽に植ゑて眺めた。又秋になると、一寸これに類した事があつた。

嵯峨野　もと山城國葛野郡の町名。今、京都市右京區。

河東白河　鴨川の東の白河。京都の東北なる白川沿岸の地。

正月の子の日　正月の上の子の日に、人々野に出でて、小松を引いて遊び、千代を祝ひしこと。子の日の遊び。拾遺集に、「子の日する野邊の小松のなかりせばちよのためしに何をひかまし。忠岑」と。

前のは主として木を引拔いて來たのであつたが、これは草類を掘るのである。萩だとか桔梗だとか刈萱、女郎花など種々の秋草をめい〳〵掘つて來て、それを前と同じやうに、前栽に植ゑて樂しんだのである。で、此等は、現今私どもが茸狩に出掛けたり、釣に行つたりするやうに、前栽に植ゑて置いて、後でそれを眺めて樂しむといふやうな事も、無論したには違ひないが、主として、掘りに行くのが樂しみであつたのである。茸狩でも、魚釣でも、行く人は茸を食ふ爲や、或は魚を養ふを目的で出掛けるのではない。取つて來たり、釣つて來たりすれば、それを料理して一日の事を話しながら食ふのも、無論愉快には相違ないが、出掛ける目的は、茸を搜し廻つて取ること、魚を釣ること、それ自身の中にあるのである。此の時代の小松引、或は前栽掘などといふことも、全くそれ

と等しく、敷物や、辨當などを從者に擔がせて、郊外に出掛けて、一日を面白く騷ぎまはるといふ事が樂しみなのである。春は若菜摘だとか、又秋になれば秋で、月見・蟲聞・野遊びなどで、兎に角郊外に出て遊ぶといふ風習が盛んであつたやうである。現今西洋人が安息日というて日曜日には家業を休んで、提籠の中に食物や飲物などを入れて、公園又は郊外の草原などに出て、一日を樂しく遊び暮すやうに、當時の人達も、やはり樂しい一日を郊外に送るといふ風習であつた。

そんな工合であつたから、同じ嵯峨野の中にしても、特に眺めのよい處とか、或は又、地勢や何かの關係から人々の多く集まる處とあまり行かぬ處とはあつたに違ひないのであるが、特に人の多く集まる處だからと言うて、其處の人の爲に休息所といふやうな物の設けは無かつたらしい。尤も

當時商業などに就いては、あまり記錄が無いので、よくは知ることが出來ないけれども、其の頃の物語類などに、さう見えない所を見ても、まづ無かつたものらしく思はれる。

此の時代には、各人が莊園といふものを作ることを考へて居つた。それは後世でいふ小領地のやうなもので、どこでも開墾しさへすれば、それが自分の領有となつたのであつた。だから近郊の地は大部分誰かの莊園となつて居つたのである。從つて此等の土地を耕す下層民は、今から見れば、まるで小屋のやうな物であつたらうが、ともかく住居を作つてゐたのである。

貴族の別莊などは景勝の地に建てられてあつた。鳥羽・龜山・水無瀨などといふ處には、皇族方の御別莊も建てられてあつて、或は其處に常住せられ、或は時折の遊山に成らせら

鳥羽　京都市南郊の地。今、上鳥羽は下京區、下鳥羽は伏見區に屬す。
龜山　山城國葛野郡の地名。後嵯峨・龜山兩上皇の御所のありし地。
水無瀨　攝津國（大阪府）三島郡島本村の地名。

れることもあつた。又此の時代は文學の非常に盛んな時であつたので、詩や歌の會などは、主としてこの別莊のやうな所で行はれた。

見渡せば山もと霞む水無瀨川
ゆふべは秋となにおもひけむ　（新古今集）

と、およみになつた後鳥羽天皇の水無瀨殿などは、實に當時有名なものであつた。

當時の公家達の間には、分家といふことが盛んに行はれた。また子供が一人前になると自

水無瀨殿　水無瀨にありし後鳥羽上皇の離宮。今、水無瀨神社。
挿繪　雨の白河。（田村彩天筆）

分の家は子供に讓つて、自分達は隱居するといふやうな事も起つて、さうした人達が、郊外に家を建てて住まつてゐるといふやうな例もあるのである。で、當時の人は、多く隱居すると僧になつた。從つて其の住宅は寺となつたのであつた。故に昔の寺には決して住家と變らず、各人の住宅が其の儘寺であるものもあつた。後年禪宗が渡つて來てからは、寺に種々な形式を用ゐるやうになつたけれど、當時は別に變らなかつたのである。だから、今でも京都のごく古い寺を見ると、當時の住宅と少しも變つてゐない。

そしてさうした住宅は、垣も低くし、門なども極めて開放的なものであつた。住宅に塀や何かをつけるやうになつたのは、武家時代からの風習であつて、當時は極めて開放的であつたのである。陛下が舞を御覽ぜらるゝ爲に、近郊の地に

舞臺を作られて、一方に玉座が設けられる。陛下が其所から御覽になつてゐらせらるゝと、すぐ左右から公家達が侍して、同じく拜觀してゐる。すると向うの岩蔭や叢の中からは、土地の下人どもが首を突出して、等しく其の舞を拜觀するといふ有樣であつた。當時の上流人と下層民とは、其の生活狀態から見ると、非常な距離があつたのであるが、斯うした事に就いては、下層民だからといつて、無下に叱りとばす程狹量では無かつたのである。別莊などで、戸を開け放して置くと、外面を使が走るなどが、座敷の中からよく見られる。それをむしろ興ある事に思つて居つたのであつた。

さうした別莊や寺は、大きなものは種々の方法に依つて保存されるけれども、小さいのは主が無くなると、其の儘立ち朽れになるので、空家や破家といふものは到る處にあつた。彼の有名な小督の局が身を寄せられたと言ふのも、或はさうした所であつたかも知れない。國司にでもなつて遠國に出向く時などは、隣人に其の家を託したものであるが、賴まれた人も、自分の家で無いから掃除なども滿足にはしてくれない。そんな工合で、三年なり四年なりの任期を終つて歸つて見ると、眼も當てられぬやうになつてゐたなどといふ事は當時に於て、決して珍らしいことでは無かつたのである。

—（醒雪遺稿）—

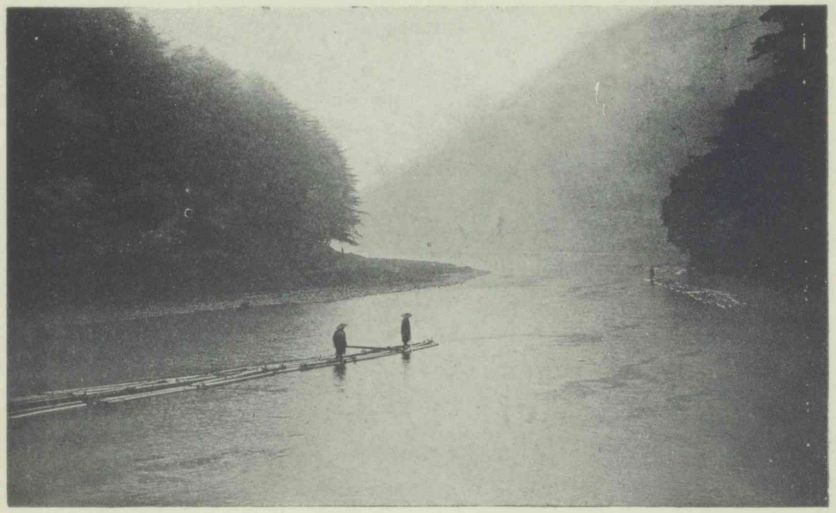
荒雞見露秋蘭泣　深洞聞風老檜悲。

（秋日過二石和寺一。源英明—和漢朗詠集）

君なくて荒れたるやどの板間より月のもるにも袖はぬれけり

（讀人不知—古今六帖）

小督の局　高倉天皇の寵姫。權中納言藤原成範の女。後、故ありて嵯峨野に隱栖す。今、その遺址、大堰川渡月橋畔にあり。



雨の保津川

一三　雨の興

松平定信

「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄み渡りぬるものなれ。されど闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹き交ふは、又優りぬるやうに覺ゆ。」といへば、「雨ぞいと優りぬるを。」といふ。「いかに。」と問へば、「いでや旱天の雨は更なり、草木の花咲き、實のるも、皆此の惠みにこそあんなれ。又其の感情の深さをいはば『今日は元日なりけり。』といふに、雨そぼ降りて霞み渡りたるは、『げに春や。』とぞ思ふめる。師走の晦のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いと細やかに降れるが、衣潤せども降るとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、住みすてし蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に

松平定信　老後に樂翁と號す。磐城國白河の城主。後に德川家齊に仕へて幕府の老中となる。文政十二年（一四八九）歿、年七十二。

い（蛛網）

緑やゝ添ひ行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、ともにいとなく長閑なり。燈火挑げても、何ほのかに響き來るも、心澄み渡りぬるぞかし。その外、梅が香の濕り、夜深く匂ひ渡るも、花に憂しとかこちぬるも、あはれはありけり。春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。郭公の初音いかにと思ふ頃、雨のはらはらと降り出でたるも、五月雨の幾日も降り暮して、書の卷々繰り返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。又暑さに堪

挿繪　五月雨の頃。

へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風一しきり吹き落ちたるに、柳・蓮なんどの葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降り來て物音も聞えず、土の匂ひ來るもいと心地よし。軒端は玉の簾かけたらむやうに玉水の絶え間なく落ちたるに、庭は一つ湖になりて、あるは瀧落し、又は水走らせたるに、人々暫し物いはで打守り居たるもをかし。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へ躍り出でて餌拾ふさまなり。初め雲の立ち出でし方は、はや空の一入綠に見えて、虹なんど見ゆるに、木々の綠の庭潦に影見ゆるもいと涼し。老いたる女など、雷の音に驚きて這ひ出でたるが、『今日のは若かりし時のごと、よく霽れにけり。今時のは、かく霽るゝこと稀なり。』なんど、はや繰言いふもあり。『彼はかくあわてし。』

などいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、『今日は蚊も少なかるべし。雷の音もいと微かなり。この頃の暑さも忘れぬ。』とて、端近う出づれば、夕月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の物待ち顔に空うち睨みて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋來る頃の雨は昨日に變りて、何となう淋し。荻の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身に沁む心地ぞする。常に聞き馴れし筧の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨も亦をかし。まいてやゝ夜寒の頃、鳴き嗄したる蟲の音の、雨のをやみに幽かなる聲して、枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々も染めなむと思へば、『茸な

挿繪　松平定信自畫像。

ども生ひいでなむ。栗もはや落つべし。』などと、童の物淋しげに燈火に向かひつゝ言ひ出づるも、げに様々なり。夜深き鐘の音のうち濕るものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、今は世に亡き友の事も思ひ出でて、鐘撞く人の心をもあはれと思ふばかり、感情は深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊の移り行きて一盛見するも、尾花の露重げにうち萎れたるに、龍膽の怨深く咲きたるあたりもつきづきし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐるまでも凋み後れたる、亦あはれなり。野分の風はおどろおどろしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれを添ふるは、秋の習なるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降り來るも、又音かへて枕とふもをかし。月よりも、闇の夜よりも、あはれ深きものには侍らずや。」といへば、「かやうにいひ並べては、げにもといふべからむが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨はをとつ日より降り出でしをとおもふ心はかはらじ。」と、心の中に思ひて聞き居しも、またをかしかりけり。

―（花月草紙）―

うちしぐれ故郷おもふ袖ぬれてゆくささとほき野路のしのはら

（阿佛尼）

挿絵　秋雨。（池上秀畝筆）

阿佛尼　十六夜日記の筆者。弘安六年（一九四三）歿、年七十五。

一四　海邊

中島廣足

一、舞子の濱

舞子の濱といへるところは、播磨路にていとをかしきところなり。生ひつゞきたる松のひろごりふしたる枝々、高うあらはれたる根のさまなど、ことどころに似ず。渚に寄する波、沖行く帆影など、淡路の島も目に近くて、取りあつめたる景色いはん方なし。いとちひさきをうかべて渚離れず漕ぎ行きつゝ、「舟よ、舟よ。」と呼ぶこゑのをかしきに、「しばしがほどを。」と呼びよせ打ち乘りて疲れたる足をやすめつゝ、濱の方を見やれば、後れ先だつ旅人の、松のひまより見えがくれして、扇さし出でつゝ打ちまねきなどしたる、海より見るけしき、はた、えも言はずをかしく、春日ゆくともよに飽くまじき眞砂路のさまになん。

二、漁村

蜑のすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、風もたまらぬ松かげなどに、たゞかりそめに造りたる藁屋どものさま、浪打ち寄せなば、やがて流れも失せぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、何心地かせましと思ひやるだに心細し。夕つ方など、年老いたる男の子の手がらみしたるが、いそべに立ちて、けふはいと遲くもあるかな、などいひつゝ沖の方をまもりをり。孫どもにやあらむ、眞砂の上を走り歩きつゝ遊びゐたるに、入日さしたる島影より、三つ二つ歸り來る舟の舵ひきをりて誇らしげなるを、老人待ち得顔にうちほゝ笑みたるは、幸多かりしにやと見ゆ。渚によせて、跳び下るゝまゝに、網くりよせ

中島廣足　櫪園と號す。熊本の人。國語學者。歌人。元治元年（一八六四）歿、年七十三。

舞子の濱　播磨國（兵庫縣）東南部の勝地。

などとかくしつゝのゝしるに、男も女もあまた出できて、大きなる籠に魚どもとりいれつゝ擔ひもてゆくさま、さはいへど賑はしげなり。くゞつめくものもて來て、小さき魚三つ四つ乞ひもてゆく童などもあり。すべて人多くたちこみ騷ぎて、舟のあたり喧しく、さしよりてのぞくべうもあらず。いとながき網の渚にかけほしたるを、くりためてとりいれなど、やう〳〵靜まりゆけば、こなたかなた火ともしたる透影、壁もあらはにて、いとあはれにみゆ。一夜宿りてみれば、浪風の響枕をゆりて、つゆまどろまれず。曉方隣の家々目さまして、なりはひのことどもなるべし、怪しう聞きしらぬことどもを、己がじし聲高にのゝしりかはしたるげに蜑のさへづり、珍しうもをかしうも。

—（檀園文集）—

くゞつ 網の袋。

一五 芳流閣

瀧澤馬琴

古の人言はずや、「禍福は糾へる繩の如し。」と。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所、はた禍の伏す所。彼にあれば是にありとは思へども、豫てより、誰か能く其の極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ身につけつ、艱苦のうちに年を經て、得難き時を得てしかば、遙々滸我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、其の福は禍と、ふり替りたる村雨の、刃は舊の物ならで、我が身を劈く讐とぞなり。憾を爰に釋く由もなく、緯急にして意外にあり。僅に當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥の圍を切り開きて、芳流閣の屋の上に、攀ぢ登れどもとにかくに、脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死を極めたる心の

瀧澤馬琴 名は解。曲亭と號す。江戸の人。德川末期の小說家。嘉永元年（一八五〇）歿、年八十二。

人間萬事塞翁が馬 淮南子（エナンジ）にある故事。元の僧熙晦機の詩に、「人間萬事塞翁馬。推レ枕軒中聽レ雨眠」と。

禍の倚る所云々 老子に「禍兮福所レ倚。福兮禍所レ伏。孰知二其極一。」と。

犬塚信乃 八犬士の一人。名は戌孝（モリタカ）。孝の字のある玉を所持す。

滸我 足利持氏の臣大塚番作。下總國（茨城縣）猿島郡古河町。足利成氏の館の地。

ふり替りたる 「ふり」は「振り」に「降り」を懸けたり。

中は如何なりけん、思ひ遣るだにいと痛まし。されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかかる捕手の役儀。犬塚信乃を搦めよとて懇に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ゐられん事、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、彼の樓閣は三層なり。其の二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の餘熱の渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶えて、進退既に谷れる敵にしあれば、いかで我、繫ぎ留めんと鼈の、樹傳ふ如くさらさらと、登り果てたる三層の屋根には目柴翳す由もな

村雨の刄 信乃の父番作が、舊主持氏から預りて守護せる名刀。鞘を拂へば刃尖より村雨の如き水氣を生ずるといふ。

舊の物ならで云々 信乃は父番作の歿後、伯父大塚蟇六に養はる。蟇六一夜信乃を川漁に誘ひ、わざと誤つて自ら水中に沒す。信乃泳いでこれを救ふ間に、蟇六と共謀せる同舟の惡漢網干左母次郎が村雨の中身をすりかへたり。

芳流閣 滸我城中の三層樓。

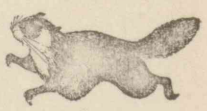
犬飼見八信道 八犬士の一。信の字のあらはれたる玉を持つ。

犯せる罪のあらずして云々 見八は、執權在村と意が合はず、任ぜられし職役を辭退し自ら身の暇を請ひし故、主命に叛くの理由で投獄さる。

坂東太郎 利根川のこと。

く、迭に透を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有樣、浮圖の上なる鶴の巣を、巨蛇の窺ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史、在村等の、老黨若黨圍繞せる床几に尻を打掛けて勝負如何にと見上げたり。又閣の東西には腹卷したる許多の士卒、槍長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓杖突つ立て、組んで落ちなば擊ち留めんとて、項を反してこれを觀る。しかのみならず外面は連綿として杳なる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け力衰へず、能く見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虛空を翅るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべく



成氏朝臣 足利持氏の子。鎌倉管領。後、下總に住みて古河公方と稱す。

横堀史在村 成氏の權臣

挿繪 馬琴書像。

墨氏が飛鳶を云々 墨氏。名は翟。周の學者。飛鳶のことは韓非子に「墨氏作二木鳶一、三年而成、飛一日敗レ。」と。

魯般が云々 魯般、姓は公輸、名は般。周代の魯の人。雲の梯のことは、墨子に「公輸般爲二雲梯一、將二以攻レ宋。」とあり。

もあらず。渠鳥ならずも網に入りぬ、獣ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば綷みな休まん、脱れ果てじと見えたりけり。

其の時信乃思ふやう、「初層・二層の屋の上まで、追ひ上らんとせし兵等を斫り落しつる其の後は、絶えて近づく者なきに、今唯ひとり登り來ぬるは、世に覺えある力士ならん。這奴はこれ膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか。また富田の三郎が、鹿の角を裂く力あるか。遮莫一個の敵なり。引つ組んで刺し違へ死するに難きことやはある。よき敵に一番ござんなれ。目に物見せん。」と血刀を、袴の稜もて推し拭ひ高瀬の如き方桴に、立つたる儘に寄するを待てば、見八も亦思ふ樣、「彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦め兼ねて、他の援を借る事あらば獄舍の中より此の役儀に擇み出されしかひもなし。搦め捕るとも擊たるゝとも勝負

巴提便　欽明天皇の朝百濟に使し、雪夜幼兒の虎に喰はれしを憤り、虎穴を探りて虎を獲たり。

富田三郎　和田義盛の臣にして、將軍實朝の前にて長さ三尺七寸の鹿の角を二つ合はせて折れり。

を一時に決せんものを。」と、思ひければ些も擬議せず、「御諚ざふ。」と呼び掛けて、拿つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せ附けず。心得たりと疾き太刀風に擊つをはつしと受け留めて、拂へば透さず切りこむ刀尖、支へて流す一上一下、辷る甍を踏み駐めて頻に進む捕手の祕術。彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虛々實々、未だ勝負をわかざれば廣庭なる主從士

挿絵　芳流閣上の奮闘。

卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとゞはるかなり。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌增して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音掛聲。兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなるいと高き閣の棟にして、死を爭へる爲體世に未曾有の晴わざなれば、見八は被籠の鏁、肱當のはづれを、裏缺くまでに切り裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて撓まず去らず疊みかけて擊つ太刀を、見八右手に受け流して、返す拳に付け入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みて礑

と打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刃は鍔際より、折れて遙に飛び失せつ。見八得たりと無手と組むを、そが儘左手に引き着けて、迭に利腕楚と取り、捩ぢ倒さんと曳聲合して、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏み辷らして、河邊の方へころ〳〵と、身を輾ばせし覆車の米苞、阪より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる甍の勢、止るべくもあらざめれど、迭にとつたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の、底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、打ち累りつゝ、揑と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水烟纜ちやうと張り斷りて、射る矢の如き早河の、たゞ中へ吐き出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

—（南總里見八犬傳）—

〔參考〕
八犬士
犬江新兵衞仁。
犬塚信乃戌孝。
犬阪下野胤智。
犬村大學禮儀。
犬山道節忠興。
犬川長狹介義任。
犬飼見八信道。
犬田小文吾悌順。

一六　膏藥煉

二人　シテ　男　半袴、上下、腰帶
　　アド　男　同　右

アド「罷り出でたる者は、鎌倉方の膏藥煉でござる。某ほど、天下に膏藥の名譽なるはあるまいと思ふところに、聞けば、都にも名譽の膏藥があると申すほどに、この度都へ上り、膏藥を煉り比べて見ようと存ずる。まづ、そろそろ上らう。

（道行）やれやれ、今日は天氣もよし、このやうな仕合せはない。やあ、殊の外寂しい。道連れもない。この處に待つてよからう。連も參つたら、同道いたさうと存ずる。」

シテ「これは都に隱れもない膏藥煉でござる。某ほど膏藥の上手はあるまいと存ずるところに、聞けば、鎌倉方にも名譽

シテ　能狂言に於て、その曲一番の主人公。
アド　能狂言のわきし（脇師）。シテの相手をつとむ。

の膏藥があると申す。このたび鎌倉へ下り、膏藥を吸ひ合はせて見ようと存ずる。まづそろそろ參らう。

（道行）今日は道連れもなうて寂しうござる。」

アド「やあ、いかう松脂臭うなつた。何事ぢや知らぬ。やあ、此處な者、この廣い街道を、何故に行當る。」

シテ「いや、其方が當つた。」

アド「何と其方は何方から何處へ行く。」

シテ「身どもはちと用事あつて鎌倉へゆくが、其方は何處へ行く人ぞ。」

アド「身どもは鎌倉方の膏藥煉ぢやが、身ども程の膏藥の上手はあるまいと思ふところに、聞けば、都にも膏藥の上手があると申すによつて、煉り比べて見ようと思うて上るところでおりやる。」

シテ「さては鎌倉の膏藥煉とは和御料がことか。身どもも、其方が言ふ如く、鎌倉の膏藥煉のこと聞及んで、只今鎌倉へ下るところでおりやる。」

アド「さてはさやうでおりやるか。何と某の膏藥には系圖があるが、和御料のにも系圖があるか。」

シテ「なるほど、此方にもある。其方から語つて聞かしやれ。」

アド「心得た。語らう。よう聞かしませ。さても、昔、頼朝の御時に、生食・摺墨といふ名馬を召させられしに、何としてか、この生食が虚空をさして、とつて出た時に、御前なりし諸大名、やれ、あれを留めよ留めよと仰せられたれども、誰あつて留むる人もなかつた。その時、某が先祖の祖父罷り出でて、その馬をこの膏藥にて留めて御目にかけませうと申した。頼朝をはじめ諸大名、何として膏藥で留められうぞと仰せられ、一度

わごりよ　親しみて呼ぶ對象の代名詞。おまへ。

生食　源頼朝秘蔵の黑栗毛の名馬。宇治川の先陣爭ひにては佐々木四郎高綱の乘用となる。

摺墨　同じく頼朝秘蔵の愛馬。宇治川合戦の時、梶原源太景季に與へたり。

にどつと笑はせられた。さりながら、留めさへするなら留めさせいと仰せ出された。畏まつて候と、先祖の祖父罷り出で、膏藥を指の腹に芥子粒ほど着け、息をほつとしかけ、かの駈ける馬に向つて、あの馬吸へ吸へと申したれば、何が、膏藥の強いに引かれて駈け出でたる馬がじたじたじたじたじつと吸ひ寄つた。その時、頼朝を始め御前なる人々、さてもさても名譽なることかな。何と、その膏藥には銘があるかと仰せられた。いやいや何も銘はござらぬ。只、物を吸ふによつて吸膏藥とばかり申しまする由、申し上ぐる。頼朝聞し召し、かほどの膏藥に銘がなうてはなるまい。銘を取らせうとあつて、馬を吸うたる膏藥なれば、鎌倉一の馬吸膏藥と下されてよりこの方、某が膏藥は鎌倉に隱れはおりない。」

シテ「これも餘程の系圖ぢや。さらば身どもが系圖を語つて

聞かさう。よう聞かしめ。」

アド「心得た。」

シテ「さても平相國淨海の御時、御庭を作らせられしに、立石なる石を、都の北山より、三千人して引いて參り、やうやう北の御門まで引寄せたれども、御門より内へ入るることがならなんだ。その時、某が先祖の祖父罷り出で、あの石を直したう思し召さば、處を指いて仰せつけられい。膏藥にて吸ひ寄せて御目にかけうと申した。その時、淨海を始め御前の人々、さてもさても大きな言をいふものかなと、一度にどつと笑はせられた。さりながら、直すならば、言ひつけ直させい。直さぬに於ては曲事に言ひつけると仰せ出された。その時、先祖の祖父、畏まつて罷り出で、かの膏藥を透頂香ほど指の腹につけ、息をほつとしかけ、大石に向ひ、あの石吸へ吸へといひ

平相國淨海　清盛のこと。

曲事　處罰の意。

透頂香　外耶藥（ウキラウヤク）ともいふ。咳嗽を治めるに效能ありと。

ければ、かの大石が膏藥に引かれて、じりじりじりじり、じつと吸ひ寄せられた。淨海をはじめ、各さても不思議なる膏藥かな。何と銘があるかと問はせられた。いや、何とも銘はござらぬと申し上げければ、かほど名譽の膏藥に銘がなうては叶ふまいと仰せられ、石を吸うたる膏藥なれば、天下一の石吸膏藥と下されてよりこのかた、身どもの膏藥は天下に隱れがおりない。」

アド「眞にこれは餘程の系圖ぢや。互に劣らぬことぢや。いざ、この上は、藥味を明かして、吸ひ合はせて見ようか。」

シテ「それがよからう。何と和御料が藥味は何々が入るぞ。」

アド「されば、身どもの藥味は、むづかしい物がなかなか入る。まづ、地を走る雷、空を飛ぶ胴龜、木に生つた蛤、このやうな物が入るわ。」

シテ「それはむづかしい物ぢや。身どもが藥味も色々大切な物が入る。白烏、赤犬の生膽、三足の蛙、このやうな物が入るわ。」

アド「それは大切な物ぢや。今などはあるまいが、何とおしやる。」

シテ「その事ぢや。今この藥味は求むる事がならぬ。先祖の祖父より求め置かれたを、只今まで少しづつ惜しみづかひにするわ。」

アド「さうであらう。」

シテ「いざ膏藥を吸ひ合はせて見ようか。」

アド「一段よからう。拵へさしませ。」

シテ「鼻の先につけて吸ひ合はせう。何と、よいかよいか。」

アド「拵へはよいぞ。さらば、ちと鎌倉へ引かうぞ。」

シテ「いやいや、引くことはなるまいぞ。さても、さても、強い膏

藥ぢや。さらば、ちと都方へ引かうぞ。」

アド「いやいや、都へはなるまいぞ。これは何とするぞ、何とするぞ。さてもさても、強い膏藥ぢや。これから鎌倉へ一引に引いてくれうず。」

シテ「いやいや、なるまいぞ、なるまいぞ。さても、さても、これも強い膏藥ぢや。それなら都方へ一引に引かうぞ。やあ、やあ、やあ。」

アド「これはならぬぞ、ならぬぞ。何とするぞ、何とするぞ。」

シテ「そりや、引きこかした。さあ、勝つたぞ、勝つたぞ。」

アド「いやいや、今のでは知れぬぞ。も一度勝負をせい。やるまいぞ、やるまいぞ。」

―（續狂言記）―

一七　狂文二篇

一、浮世

平賀源内

古人「春宵一刻價千金」と高値につもれば、また浮世を三分五厘と捨て賣りにする男もあり。然れども、春宵一刻に千金出して買ふたはけもなく、三分五厘に賣りてしまふ出來合ひの浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出るまゝのいひたい事、つまるところは、よくもあしくもいひなし次第の浮世にて、浮世の定めなきは、人の心の定めなきなり。

—（六々部集）—

二、鍾馗の畫賛

石川雅望

大臣と稱すれども、隨身・舍人も從へず。降魔の利劍ありながら、鎭座せる社も見えず。顏に手足に朱をそゝぎて、ぬき身をとつて振りまはす。もしなまよひかと見てあれば、かしは餅を引窓からのぞく。下戸か上戸か分くべからぬ、文武兼備の進士の垂跡、げにちはやぶる紙幟、あふげばいよ〳〵軒に高し。

鬼すまぬ我が大君の國なれば
鍾馗の劍のぬきがひもなし

—（あづまなまり）—

道は古池の吟にひらけつ。
吟は枯野の夢にをはりぬ。
檜の木は月の笠ならねども、
影を風雅の世にあふぐらむ。

（芭蕉翁像賛—横井也有）

平賀源内　名は國倫、號は風來山人。本草學者、戲作者。讃岐の人。安永八年（一四三九）歿、年五十七。

古人　宋の詩人蘇東坡。

石川雅望　號は六樹園、又、宿屋飯盛とも。江戸の人。國學者。狂歌・狂文に長ず。天保元年（一四九〇）歿、年七十八。

ちはやぶる　神（かみ）の冠詞。

鍾馗　疫病を追ひ拂ふ神。唐の玄宗皇帝が夢に見しものを吳道子がゑがきしに始まる。

横井也有　名は時般。名古屋の人。俳人。天明三年（一四四三）歿、年八十二。

一八　民謠の話

島木赤彦

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、且また對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るにこの萬葉集時代に緊張の項點にまで達した短歌が、古今集以後の勅撰集に至つて、著しく弛緩の狀態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生みだされた歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩物であつて、そのでき方も、緊張した感情から生みだされるといふよりも、外形を整へるに苦心して作りだされたもので、內面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐないその當時の民謠に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生まれた短歌の精神が、民族的歌謠の一分流であるところの民謠に合流してゐるといふことは、決して不自然ではない。

この事は、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や、催馬樂歌などの中に現れてゐる民謠を檢べて見れば、容易にうなづくことができるのである。

笹分けば袖こそ破れめ利根川の、石は踏むともいざ河原より。（神樂歌）

島木赤彦　本名久保田俊彦。長野縣の人。文學者。歌人。大正十五年歿、年五十一。

萬葉集　二十卷。舒明天皇朝より淳仁天皇朝まで、百三十年間の歌を集む。撰者及び撰定時代未詳。或は大伴家持の撰といふ。

古今集　二十卷。我が國最初の勅撰和歌集。醍醐天皇の延喜五年（一五六五）紀貫之等、勅を奉じて撰集す。

勅撰集時代　醍醐天皇の延喜五年（一五六五）勅して古今和歌集を撰せしめられし頃より、後花園天皇の永享十年（二〇九八）の新續古今集（最終の勅撰集）までの間、約五百三十餘年をいふ。

神樂歌　神樂に和してうたふ歌。

催馬樂　雅樂の一。初め上代の民謠にて、馬方のうたひしもの、平安朝以後、歌曲となせり。

澤田川、袖漬くばかり淺けれど、はれ、淺けれど、
久邇の宮人高橋渡す、あはれ、其處よしや、
高橋渡す。（催馬樂）

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謠から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以つて、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。そしてこの民謠の系統は、足利・德川の各時代を經て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

然らばそれ等の民謠の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に產みだした惻々として人の心を動かす力をもつ情調である。農民の唄ふ歌謠には、のん氣に似て、その底には重々しい調子が籠つてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊の遣る瀨ない哀

澤田川　山城國（京都府）相樂郡にあり。
久邇　聖武天皇、天平十二年（一四〇〇）十二月都を平城（ナラ）より遷して、同十六年正月、難波宮に遷り給ふまでの都。今の相樂郡の木津町・加茂町・上狛町・瓶原町地方一帶の地。

音が籠つてゐる。

乳が崎沖まぢや見送りましよが、
それから先は神だのみ。

の唄の如き、必ずしも船唄とばかりはいへぬが、海中の孤島に賴りなく住む人々の心理が、「神だのみ。」の哀音となつて現れてゐる純粹さを味はふべきである。

淺間の煙が北へと靡く、
今宵泊らにや雨になる。

一誦して淺間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。淺間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。そこの宿引の女が旅人を呼びとめて、一宿を勸める心がこの歌の心

乳が崎　伊豆七島中、大島の西北端。
淺間　長野縣と群馬縣との境にある活火山。
碓氷越　碓氷峠を越えること。碓氷峠は、淺間山の東南にて、同じく長野・群馬兩縣の境にあり。
追分　長野縣北佐久郡の地名。今、西長倉村と改む。もと、中仙道と善光寺道との分岐點。
坂本　群馬縣碓氷郡の町名。碓氷峠の東麓。
中仙道　東山道を經て、東京より京都に行く街道。

である。一夜の宿を勸める歌謠を、勸められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀れな漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空にはいつも淺間の山の煙が靡いてゐる。煙は多く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる。」は、この嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戲れの問題ではないのである。

麥ついて、夜麥ついて、お手にまめが九つ。
九つのまめを見れば、親里がこひしや。

麥をつくは農家の新婦である。嫁して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとゞ落着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をつく。夜

輕井澤　長野縣北佐久郡の町。碓氷峠の西麓。

麥をついて掌にできたまめを眺めて、親里を思ふ心の痛切さは、恐らく人麿・貫之の秀歌にも勝るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が叙べられてゐる。そしてその民謠としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を現す民謠ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐるといひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少なくとも土の個性を離れることはできない。その土地のもつ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謠に強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで。」の唄が島に生まれ、「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生まれ、「麥ついて。」の唄が伊豆南方の田舍に生まれてゐることを考へ合

人麿　柿本氏。持統・文武兩天皇に仕へたる歌人。
貫之　紀氏。歌人。元慶九年（一六〇六）歿す。

はせると、民謠と地方との關係をほゞ推測することができよう。たゞ民謠の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少なくない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れて行はれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れてくる。

例へば、「麥ついて。」の歌は甲斐の南方では、

大麥ついて麥ついて、お手にまみよ九つ、
九つのまみよ見れば、親の在所こひしよ、

と唄うてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味はれる。

この苗をとりあげてどこに棲まずや。

まみよ　「まめを」の訛。

いなごや。きりすすきすき葦の、
こやのうらに棲まずや。

これは伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。思ふにこの歌謠は、決して近代のものではない。少なくとも、平安時代か、或はそれ以前に生まれたものが、その優れた秀でた調子をもつが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち滿ちてゐる。この美しい心情をもつた民謠が、今日の日本に殘つてゐて、現在農夫の口に歌はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つた薄や結きあんだ葦の小屋の中に、自分とともに住まないか。」

稻生澤村　靜岡縣賀茂郡下田町の近傍。

といふその心は、何といふ單純な、同情のこもつた愛に滿ちた心であらう。自然の中に愛に包まれて、その日の勞働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心をもつ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗をとりあげて。」は、原作は勿論「この稻を刈りあげて。」であつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも殘つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し
二の坂越して、
三の坂越しや强清水。

これは信濃國の、民謠中、出色の一である。「草刈馬に乘つて、八ケ嶽の裾野を上る。一の坂がある。二の坂がある。坂を上る

八ケ嶽　長野・山梨兩縣に跨がる火山。

うちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの强清水が湧いてゐる。」といふ意で、草刈の男女に唄はれることによつてこの唄の趣が深い。そして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等の民謠の中にも現れてゐるのである。

一九　諺

藤井乙男

格言は、賢哲の垂訓にして、俚諺は、凡俗の信條なり。前者は明かにその立言者を求め得べく、後者は輿衆の聲にして、その作者を知るべからず。隨うてその發生の時期を精確に定めんこと頗る難しと雖も、多數の俚諺中には、間〻その發生の時期・前後・新古の關係・變遷等を推測するを得べきものなきあらず。

吾人が座談・演說等に日常使用する多數の諺は、吾人の祖先より知識的・道德的遺產の一部分として繼承せるものにて、吾人が新たに製作したる物にあらず。有史以來、世々の人類が內外諸種の天然・人事に遭遇し、物に觸れ事に感じ、或は觀察し、或は考慮し、或は感激し、喜怒哀樂種々雜多の經驗を

藤井乙男　紫影と號す。兵庫縣の人。明治元年生る。國文學者。文學博士。京都帝國大學名譽教授。

積みて人生に普通なる知識を感得して、後世子孫に遺せる者、これ卽ち今日行はるゝ諺の多數なり。「手輕にして愛用し易きが爲に滅亡の非運を免れし古知識の斷片なり。」とは、二千年の昔俚諺研究の率先者アリストテレス既に之をいへり。トレンチは、その俗諺論に於て「今日文明諸國の共有財產とも稱すべき諺は、各國民が祖先傳來の遺產にして、或は口口に語り繼ぎ、或は前代の記者によりて後世に書き傳へられて希臘・拉典の古きより、中世の諺に至るまで依然として今日に存し、諸國に行はる。されば、近き世に起りたる諺ならんと一般に信ぜらるゝものにして、その淵源の極めて悠長なるを發見すること少なからず。」といへり。現今行はるゝ我が國の諺にも、その發生時代の頗る遠きものあり。「痛む上に鹽塗る。」「重荷に小づけ。」の如きは既に萬葉集に見え、「一升桝

アリストテレス　(西紀前384—322)希臘の哲學者。
トレンチ　(1807—1886)英國の宗教家。言語學者。詩人。
拉典　古代ローマ。

に二升は入らぬ。」といふは枕草紙に出で、「死ぬる子みめよし。」「飯粒で鯛釣る。」といふは共に早く土佐日記に見えたり。此等が、孰れも千年内外の歴史を有するものならんとは、この諺を口にする人々のなべて豫想せざる所なるべく、今日にては、既に之を徴すべきものなしと雖も、その淵源の遠きこと前者に相讓らざるもの尚多かるべし。降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、現代のものと同一なる諺の數、次第に多くなりゆくはいふ迄もなき事にて、鎌倉・室町時代の載籍を通讀せし者の容易に認め得る所なり。

祖先傳來の他に、外國より輸入せられたる諺あり。時としては、彼我相交換して、雙方同時に行はるゝより、孰れが借主にして、孰れが貸主なるか、容易に判別し難きもの亦少なからず。四面海を環らし、海東に屹峙せる我が國は、歐洲諸國の

枕草紙 清少納言の隨筆。

土佐日記 紀貫之が土佐國守の任滿ちて歸京せし時の海路の紀行。

如く他國との交通自由ならず、人種言語の關係も、亦彼の如くならざるより、他國と諺を貸借交換して、その本主の誰なるかを判ずるに苦しむが如き患少なしと雖も、支那・朝鮮との交通夙に開け、儒佛の教深く民俗に染みしより、内外典より來れる諺甚だ多く、一見して外國將來たるを認むべき者の他に、衣服外觀は純然たる國風ながら、なほその正體は儒佛にあらずやと疑はるゝもの往々これあり。殊に僧徒は、布教の必要上、經文中の金言を俗釋して、眼に一丁字なき善男・善女を教化するより、その傳播極めて早く、廣く諺として世上に流布するに至る。「合はせものは離れもの。」「仰向きて唾はく。」「蛙の面に水。」「鹿の角を蜂が螫す。」の如き、巧みに日本化せられたり。「渇すれども盗泉の水を飲まず。」「麒麟も老いては駑馬に劣る。」の類は、何人も一見して國産にあらざるを知

合はせものは云々 盛必有レ衰、合會有レ別離。（涅槃經）

仰向きて云々 惡人害レ賢者、猶レ仰レ天而唾。（四十二章經）

蛙の面云々 蛙面水。（禪林句集）

鹿の角を云々 鹿角蜂。（禪林句集）

渇すれども云々 渇不レ飲二盜泉之水一、熱不レ息二惡木之蔭一（文選）

麒麟も云々 麒麟之衰也、駑馬先レ之。（戰國策）

るべきも、「麻につるゝ蓬。」「井の中の蛙。」「情に刃向かふ刃なし。」の如き極めて通俗にして平易なるものが、佶倔なる儒教の語に胚胎せしものとは誰か思ふべき。「壁に耳。」といふも古き諺なれど、既に詩經に「君子無易由言、耳屬于垣。」の語あり。拉典にも同一の諺ありて、それより汎く今日の歐洲諸國に分布せり。

維新後、西洋諸國との交通盛んにして、外國語を學ぶ者多きに隨ひ、外國の諺の輸入せられしもの、またこれあり。「時は金。」「習慣は第二の天性。」「二兎を追ふ者は一兎をも獲ず。」などの類、卽ち是なり。尙又、人の社會に立つや、生活上絕えず新經驗に遭遇し、知識上に道德上に、新たなる自家の確信を生ずるや、その經驗的所見を發表するに一種の文句を以てす。而して、その文句にして、幸に諺たり得べき資格を具備する

麻につるゝ云々　蓬生ニ麻中ニ、不レ扶而直。（荀子）

井の中の蛙　井鼃不レ可ニ以語ニ於海ニ者、拘ニ於虛ニ也。（莊子）

情に刃云々　仁者無レ敵。（孟子）

時は、一般國民の贊同を博し、遂に諺として成立すべき權利を享有するに至る。

一國の俚諺は、生々蕃殖して窮期なきと共に、一方舊く行はれて、既に國民の記憶を去りたるものはた少なからず。此の如く、舊を忘れ新を迎へて、俚諺は時代と共に增減變遷するものなり。

古來の典籍、殊にその通俗的なるものは幾多の諺をその中に採錄含蓄するのみならず、書中の佳句妙章は、往々世人に裁斷割取せられて、恰も本來の諺なるかの如く使用せられ、時としては、漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利ならしむる餘り、一見その出所を辨知し難きまで、相貌を變ずるに至ることあり。和歌・俳諧・俗歌の類は、その形體短小にして引用にも記憶にも便利なるを以て、諺の如く使用

せらるゝもの多し。

和歌より來れるものは、例へば、

山川の末に流るる橡がらも
　みをすててこそ浮かむ瀬もあれ

思ふこと一つ叶へば又二つ
　三つ四ついつもむつかしの世や

の如き、又、連歌の附句、及び俳句・川柳より來れるものは、例へば、

草の名も所によりて變るなり　救濟

涙花の蘆は伊勢の濱荻　芭蕉

物いへば脣寒し秋の風　千代

百なりや蔓一すぢの心より　蓼太

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

山川の云々　空也上人繪詞傳に見ゆ。

思ふこと云々　後水尾天皇の御製なりといふ。

救濟　室町時代の人。連歌を以て名あり。二條良基の師。

千代　加賀の人。安永四年（一四三五）歿す。

蓼太　大島氏、江戸の人。

大男總身に智慧がまはりかね

孝行をしたい時には親がなし

の如きもの是なり。

訓誡の意を含み、又は道義上の譬喩に供すべき詩歌・俳句が諺として用ゐらるゝのみならず、偉人名士の語は、直ちに當時の人口に膾炙し、永く後世に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。孔・孟・釋迦などの金言の如きはいふも更なり、王彦章が「豹死留皮、人死留名。」といひ、歴山大王（アレキサンダー）が波斯の大軍來り襲はんとするを聞き、自若として「一屠兒、千羊を恐れず。」といひ、家康が、五字七字の戒「うへをみな。みのほどをしれ。」の如き、一たび此等偉人・傑士の口頭を出づれば、忽ち千萬人の間に傳唱通用せられ、永く世の諺となりて滅びず。定家が「和歌に師匠なし。」と教へ、芭蕉が之に倣ひて「俳諧に古人な

王彦章　梁の人、字は子名。天明七年（一四四七）歿。年八十。

歴山大王　（西紀前 356—323）マケドニヤ王。

定家　藤原俊成の子。鎌倉時代の歌人。仁治二年（一九〇一）歿。「和歌に師なし」の語は詠歌大概に出てゐる。

し。」と唱へたるが如き、前數者に比して適用の範圍稍狹しと雖も、名人の一語、世上の諺となるに至つてはその揆一のみ。

諺は、通俗をむねとすれども、必ずしも、凡人庸流の口にのみ出づと斷ずべからず。寧ろ世故に長け、機智に富み、才識時俗を拔くこと一頭地なる者にして始めて、痛切警拔なる人生の批評、諷刺を擅にし得べきを記憶せざるべからず。「武士は食はねど高楊枝。」「花は櫻木、人は武士。」と高く標置し、「馬方、船頭、お乳の人。」「商人の空誓文。」と罵倒したるが如き、その立言者の地位如何を察するに難からざるなり。

詩歌、格言等より來れる諺はその發生の緣由一目瞭然たれども、此の如きは無數の俚諺中、極めて小部分にして、その大多數は、何時如何にして生ぜしか、生誕の時日もその父母も漠として知るべからざること、恰も車馬喧閙の十字街頭に置き去りにせられたる棄兒の如し。幸にして、この兒愛敬ありて人なつこく、機轉利きたるより、衆人の愛顧を得、饑ゑず凍えず、無事に成長して世間に重寶がらるれども、人も我もその來歷如何を知る能はざるは、依然として、少しもありし昔に異ならざるなり。されば諺の起源として世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの極めて少なく、諺の起源といはんよりは、寧ろ諺の爲に後日想像附會せしにあらずやと疑はるゝもの、十の七八なり。さるを强ひて、之が起源を求めんとするは、猶棄子の系圖を作るが如く所謂「骨折損の草臥儲。」たること多かるべし。

—(改訂中等國文)—

二〇　昔ものがたり　上

一　武勇

頼光朝臣、寒夜に物へありきて歸りけるに、頼信の家近くよりたれば、公時を使にて、「たゞ今こそ罷り過ぎ侍れ。この寒さこそ、はしたなけれ。美酒侍るや。」といひたりければ、頼信朝臣、折ふし酒飲みて居たりける時なりければ、興に入りて、「ただ今見んやうに申し給ふべし。この仰ごとによろこび思う給へ候。御渡りあるべし。」といひければ、頼光則ち入りにけり。盃酌の間、頼光厩の方を見やりたりければ、童を一人縛めておきたりけり。あやしと見て、頼信に、「あれにいましめておきたるものは誰ぞ。」と問ひければ、「鬼同丸なり。」と答ふ。頼光驚きて、「いかに鬼同丸などを、あれていには縛め置き給ひたるぞ。犯しあるものならば、かくほどあだにはあるまじきものを。」といはれければ、頼信「げにさる事にて候。」とて、郎等を呼びて、猶したゝかにいましめさせければ、金鎖をとりいでて、能く逃げぬやうにしたゝめけり。鬼同丸、頼光の宣ふ事を聞くより、口惜しきものかな、何ともあれ、今宵のうちにこの恨みをばむくはんずるものを、と思ひ居たりけり。盃酌數獻になりて、頼光も醉ひて臥しぬ。頼信も入りにけり。夜更けしづまる程に、鬼同丸究竟のものにて、いましめたる繩・金鎖ふみ切りて遁れ出でぬ。狐戸より入りて、頼光の寢たる上の天井にあり。この天井引きはなちて落ち懸りなば、勝負すべきこと異儀あらじと思ひためらふ程に、頼光も、たゞ人にあらねば早くさとりにけり。落ち懸りなば大事と思ひて、「天井に、鼬よりも大きに、貉よりも小さきものの音こそすれ。」といひて、

頼光　源滿仲の長子。圓融・華山・一條・三條・後一條の五天皇に歴事し、攝津・伊豫・美濃等の國守を歴任す。武將として英武驍勇、最も射技に長ず。治安元年（一六八一）歿す。

頼信　頼光の弟。

公時　坂田氏。頼光四天王の一。頼光四天王とは、公時の外に、渡邊綱・碓井貞光・卜部季武。

鬼同丸　一條天皇の頃の惡少年。

「誰かさぶらふ。」と呼びければ、綱、名のりて参りにけり。「明日は、鞍馬へ参るべし。いまだ夜をこめて、これよりやがて参らんずるぞ。某々供すべし。」といはれければ、綱承りて、「皆これに候。」と申してゐたり。鬼同丸この事を聞きて、こゝにては今は叶ふまじ、醉ひ臥したらばとこそ思ひつれ、なまさかしき事し出でては悪しかりなん、と思ひて、明日の鞍馬の道にてこそと思ひかへして、天井をのがれ出でて、鞍馬のかたへ向ひて、市原野の邊にて、便宜の所を求むるに、立ちかくるべき所なし。野飼ひの牛のあまたありける中に、殊に大きなるを殺して、路頭に引き臥せて、牛の腹をかき破りて、その中に入りて、目ばかり見出だして待ちにけり。頼光、案の如く來りけり。浮衣に太刀をぞ佩きたりける。綱・公時・貞光・季武等皆供にありけり。頼光馬をひかへて、「野の景色興あり。牛その數あり。お

綱　四天王の一、渡邊綱。
鞍馬　京都市の北方。

のおの牛追ふものあらばや。」といはれければ、四天王のともがら、我も我もとかけて射けり。誠に興ありてぞ見えける。その中に、綱いかゞ思ひけん、とがり箭をぬきて、死にたる牛に向ひて弓を引きけり。人、あやしと見る所に、牛の腹のほどをさして、矢を放ちたるに、死にたる牛、ゆす〳〵とはたらきて、腹の裡より大の童打刀をぬきて走り出でて、頼光にかゝりけり。見れば鬼同丸なりけり。矢を射立てられながら、なほ事ともせず敵に向ひけり。頼光は少しもさわがず、太刀を抜きて、鬼同丸が頭をうち落してけり。やがても倒れず、打刀をぬきて、鞍の前つ輪せめてつきたり。さて頭はむながいに喰ひつきたりけるとなん。死ぬるまで猛くいかめしう侍りけるよし、語り傳へたり。まことなることにや。

―（古今著聞集）―

古今著聞集　二十卷。橘成季の撰。

二　鳥羽僧正

鳥羽僧正は、近き世には、竝びなき繪かきなり。法勝寺の金堂の扉の繪かきたる人なり。いつほどのことにか、供米不法のことありける時、辻風の吹きたるに、米の俵を多く吹上げたるが、塵灰の如くに空にあがるを、大童子・法師ばら走りよりて、取りとゞめんとしたるを、さま〴〵におもしろう筆を揮ひて書かれたりけるを、誰かしたりけん、その繪を院御覽じて、御入興ありけり。その心を、僧正にお尋ねありければ、「あまりに供米不法に候ひて、實のものは入り候はで、糟糠のみ入りて輕く候ゆゑに、辻風に吹き上げられ候を、さりとては、小法師ばらが取りとゞめんとし候が、をかしう候を、書きて候。」と申されければ、比興のことなりとて、それより供米の沙汰嚴しくなりて、不法のことなかりけり。（古今著聞集）

鳥羽僧正　大僧正覺猷。宇治大納言源隆國の子。天台座主又は三井寺の長更となり、後に鳥羽に住す。故に鳥羽僧正の名あり。戲畫に長ず。後世、その畫風を鳥羽繪といふ。保延六年（一八〇〇）寂、年八十八。

法勝寺　天台宗。京都市の東郊、白川の北にあり。白河天皇の創建。

院　鳥羽法皇（第七十四代）。

三　昔ものがたり　下

一　能因法師

能因入道、伊豫守實綱に伴ひて彼の國に下りけるに、夏の初、日久しく照りて、民の歎あさからざりけるに、神は和歌にめで給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を國司頻りにすゝめければ、

天の川苗代水にせきくだせ
　　天降ります神ならば神

と詠みて、みてぐらに書きて神司して申し上げさせたりければ、炎旱の天俄に曇り渡りて、大いなる雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて綠にかへりにけり。忽ちに天災をやはらぐること、唐の貞觀のみかどの蝗を呑めりし政にも劣らざり

能因入道　俗名橘永愷（ナガヤス）。白河天皇の御代の歌僧。

伊豫守實綱　日野資成の子。藤原姓。

三島　國幣中社三島神社。伊豫國（愛媛縣）宇摩郡三島町にあり。

天の川云々　金葉集雜の部に出づ。

唐の貞觀のみかどの云々　唐の太宗、蝗蟲の百姓を害するを憂へ、蝗數匹を呑み、災を己の身に移せしといふ故事。貞觀政要に出づ。

けり。

能因は至れるすき者なり。

都をば霞とともに立ちしかど
　あき風ぞふく白河の關

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さん、無念と思ひて、人にも知られず、久しく籠りゐて、色を黑く日にあぶりなして後、みちのくの方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。

―（十訓抄）―

二　松葉仙人

河内國金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びあるく。」といふ人ありけるを聞き

都をば云々　後拾遺集羇旅の部に出づ。

河内國金剛寺　今、大阪府南河内郡天野村にあり。眞言宗。行基の開創。

て、松の葉を好み食ふ。まことに食ひやおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、漸く兩三年になりにけるに、げにも身も輕くなる心地しければ、弟子どもにも、「我は仙人になりなんとするなり。」と常はいひて、今々とて、内々にて身を飛びならひなどしけり。既に飛びて上りなん。」といひて、坊も何も弟子どもに分ち讓りて、「上りなば仙衣を着るべし。」とて、かたの如く腰に物をひとへ卷きて出で立つに、「我が身にはこれより外は入るべきものなし。」とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰につけて、既に出でにけり。

弟子・同朋なごり惜しみ悲しび、聞き及ぶ人遠近市の如くに集りて、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、この僧、片山のそばに差し出でたるいはほの上にのぼりぬ。一度に空へのぼりなんと思へども、近く先づ遊びて、事のやう人々に

見せたてまつらんとて、「かの巖の上より下に生ひたりける松の枝にゐて遊ばん。」といひて、谷より生ひのぼりたる松の上、四五丈ばかりありけるを、さかさまに飛ぶ。人々目をすまし哀れをうかべたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん。かねて思ひしよりも、身重く力うきく〳〵として弱りにければ、飛びはづして谷へ落ち入りぬ。人々淺ましく見れども、これほどのことなればやうあらん、定めて飛び上らんずらんと見るほどに、谷の底の巖にあたりて水瓶も割れ、また我が身も散々に打ち損じて、たゞ死にに死にぬれば、弟子・眷屬騷ぎ寄りて、「いかに。」と問へば、いらへもせず、僅に息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へ舁ぎ入れつ。こゝに集れる人笑ひのゝしりて歸りけり。

さて、この僧、あるにもあらぬ樣にて痛み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も恥かしながらあつかふあひだ、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、としごろいみじく食ひのきつる五穀をもて、さまく〳〵いたはり養へば、命ばかりは生くれども、足・手・腰も打ち折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふにもおよばず、もとの如く五穀むさぼり食ひて、弟子どもにゆゝしく讓りたりし坊も實も取り返して、かゞまりゐたり。

—（十訓抄）—

十　訓

第一　可空心操振舞事。
第二　可離憍慢事。
第三　不可侮人倫事。
第四　可誡人上多言事。
第五　可撰朋友事。
第六　可存忠信廉直旨事。
第七　可專思慮事。
第八　可堪忍于諸事事。
第九　可停懇望事。
第十　可庶幾才能藝業事。

十訓抄　三卷。作者未詳。

三　文學と人生

小泉八雲

批評家の中で最も勝れたものは公衆である。一日や一代の公衆ではなく、幾世紀に亙る大公衆である。時といふ嚴刻な試驗に通過した一國民乃至人類の輿論である。眞の名聲といふものは、所謂批評家によつて作られるものではない。幾百年間の人類の意見の蓄積によるのである。それは洗煉された批評家の意見のやうに鋭くもなく、明瞭でもない。しかもこれほど確かな判斷はないといふのは、それが非常に廣大な經驗の結晶だからである。

小泉八雲　英國人。ラフカディオ・ハーン。(1850—1904)　我國に歸化して小泉八雲と改む。元東京帝國大學講師。明治三十七年歿、年五十五。

挿繪　小泉八雲。

書物の價値は、それを一度讀んで滿足するか、更に繰返し

て讀みたくなるかで定まる。眞の良書は、最初讀んだ時よりも二度目には一層心が惹かれ、讀返す度に新しい意義と美とを見出すものである。教養あり趣味ある人が、二度と讀む氣にならないやうな書物は、大したものではない。假令千萬の讀者に購はれようとも、二度と讀まれないやうな書物は、淺薄なものか、まやかしものかである。併し又、一個人の判斷を絶對に間違ひないものと考へる譯にも行かない。一流の批評家にも往々鑑識の鈍りも曇りもある。たゞ累代の公衆の判斷に至つては、疑の餘地がない。一讀しただけでは、何處がよいとも思へないやうでも、數百年來名著とされて來た書物には、きつと成程と思はれる處がある。時の試驗に合格した、このやうな大傑作だけが、眞に藏書とするにふさはしいものである。

ヒル曰く「再度以上讀破することを欲せざる書は讀むことなかれ。」

エマアスン曰く「有名ならぬものは讀むことなかれ。」又曰く「一年を經ざる著作は讀むことなかれ。」

「二度以上讀みたいと思ふ書物だけを買へ。それ以外のものは、特別の理由がない限り買はないがよい。」これが書物選擇の標準である。

かういふ大傑作に含まれてゐる價値は普遍的なものである。大傑作は直ちに青年に感動を與へるものではない。初はたゞ表面の意味や筋が面白いだけであるが、讀者が人生の經驗を積むに從つて、次第にその書の新しい意味が見えて來るものである。十八の時面白いと思つたものは、二十五では一層面白い。三十になつては全然新しい書物に見え、四十にしては、何故今までこれ程の美しさが分らなかつたかと驚く。五十・六十になつても同じ樣なことが繰返される。傑れた書物は讀者の心の成長に伴なつて成長する。シェイクスピアや、ダンテや、ゲーテの作物の偉さは、實にこゝにある。

シェイクスピア（1564—1616）英國の劇詩人。
ダンテ（1265—1321）イタリヤの詩人。
ゲーテ（1749—1822）獨逸の詩人・戲曲作者。

これについて、ゲーテにはよい例がある。彼は短篇の物語をいくつも書いたが、子供にはそれがお伽噺のやうに面白かつた。青年には嚴肅な讀物となつた。中年の者はその中の一字一句にも非常に深い意味を悟り、老人はそこに全世界の哲學と人間の智慧とを見出した。つまり讀者の頭が勝れてゐればゐるだけ、人生を知つてゐればゐるだけ、作者の偉さが分るのである。

が、これは作者が自分の作品のもつてゐる廣さや、深さを承知して書いたものではない。勝れた天分は、自ら偉大だなどとはつゆ知らずに、無意識に働くものである。そして作者の天分が大なれば大なるほど、それを自覺する機會は少い。なぜなら、偉大な天分ほど公衆は理解するのに長年月を要するからである。

何千年の昔、アラビアの或漂浪者が夜空の星を眺め、人間と、この世を作つた見えざるものとの關係に心を打たれて、その心情を歌つたものが、今なほヨブ記の中に傳はつてゐる。爾來天文學の進歩は、我々に三千萬の太陽があつて、それには各〻若干の遊星があるであらうことを敎へてゐる。現在の望遠鏡では約三億の他の世界が見える。恐らく是等の世界の內には、智的生物の棲んでゐるのも多からう。火星には我々の文明よりも更に進んだ文明があるといふ證明さへ得られさうである。我々の宇宙の概念とヨブのそれとは、實に霄壤の相違である。しかも、その單純な詩は、それがために一毫もその美と價値とを失はない。のみならず新しい天文學上の發見のある每に、ヨブの言葉は我々の記憶に新たになる。これはたゞ彼が勝れた詩人で、三千年の古人の心に宿

ヨブ記　舊約全書中の一篇。舊約全書はキリスト降誕以前の記事を集めし猶太民族及び基督敎の聖經。三十九篇あり、その內容は、法律・歷史・詩歌・豫言の四部に分たる。

つた眞理をさながらに語つてゐるからである。

アンデルゼンは、道德的眞理や人生の悟は短いお伽噺や童話で敎へるに限るといふ考から、古い話を元にして澤山の新しい面白い話を作つた。その書が今日ではどこの圖書館にも備へつけられ、子供よりも大人に讀まれる方が多い。その中に人魚の話がある。一體人魚などといふものはあるものではない。見やうによつては馬鹿げた話であるが、この話の中に現れてゐる無私・愛・忠誠の感情は不滅である。讀者はその美に打たれて、話の筋の架空なことなどは忘れて了つて、たゞ永遠の眞理を見るのである。

かういふ傑作の中から、自分の爲には何を選定したらよいであらうか。先年英國の科學者ラボックが世界名著百篇を表にしたことがあつた。それを或書肆が廉價本にして出

アンデルゼン(1805—1875)　デンマルクの小說家・詩人。お伽噺作家として名あり。

ラボック　(1805—1875)イギリスの科學者・政治家。

版した。すると、他の文學者にも、之に倣つて各信ずる處に從つて、他の百の名著を選出するものが出た。それからもう大分時が經つて、この企は何の役にも立たなかつたことが分つて來た。この叢書を購つた人は多いだらうが、讀んだ人は殆どない。これはラボックの選擇が悪いのではなく、一人の人が、銘々異なつた心をもつてゐる多數の人の讀書の課程を決めるといふことが、無理だからである。ラボクッは自分に最も感銘の深かつた書物を擧げたに過ぎない。他の文學者がやつたら、きつと彼のとは違つた表を作つたらうと思ふ。

書物の選定は、如何なる場合にも個人的でなければならない。約言すれば諸子は自分の眼によつて、自分で選定しなければならないのである。自分の性格を知りつくし、それに

エマアスン曰く「嗜好に適せざるものは讀むことなかれ。」

十分の同情をもつてゐてくれない限り、他人に自分の天分が奈邊にあるかを定めて貰ふわけにはゆかない。

併し、こゝに一つ容易に出來ることがある。それは先づ第一に今までどんな題目が一番自分に氣に入つたかを決定することである。第二に、その題目のものでは何が一番良いかを決定し、次には、同じ題目を取扱つてゐると稱してはゐるが、未だ大批評家や大公衆に定評のない場あたりのものを除外して、最良のものに沒頭することである。しかし、さういふ定評のある書物は澤山にあるものではない。凡て、大宗教の教理を書いた經典は、文學的にも第一級に位するものである。それは彫琢に彫琢を重ねて、その國語では出來得る限り立派なものに仕上げてあるからである。諸民族の理想を表現した敍事詩も亦、第一級に價する。第三には人生の反

エマアスン曰く「書を讀まば最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ群書の渉獵に記憶力を徒費することなかれ。」

敍事詩　作者自身の感想・議論を露出せずして、自然・事件・性格を客觀的に叙述したる詩。更に廣義

映としての戯曲の傑作も最高の文學に入れてよい。併し、優秀なものはダイヤモンドのやうなもので、ざらにあるものではない。

最後に私は年若い讀者に陳腐ではあるが、非常にすぐれた格言を繰返したいと思ふ。それは、

「新刊書の出版を聞く毎に古い書を讀め。」

といふことである。

—(人生と文學)—

にはかゝる題材を描寫せる叙事的文學一般。

戯曲　戯曲の構成は叙事詩の基礎に立つ。しかも作中の人物の科白は抒情思惟的要素を含み、又舞臺藝術としては種々の藝術的要素を攝取せる綜合藝術なり。

二三　沼地

芥川龍之介

ある雨の降る日の午後であつた。私はある繪畫展覽會場の一室で、小さな油繪を一枚發見した。發見——と云ふと大袈裟だが、實際さう云つても差支へない程、この畫だけは思ひ切つて採光の悪い片隅に、それも恐しく貧弱な縁へはいつて、忘れられたやうに懸つてゐたのである。畫は確か「沼地」とか云ふので、畫家は知名の人でもなかつた。又畫そのものも、唯濁つた水と、濕つた土と、さうしてその上に繁茂する草木とを描いただけだから、恐らく尋常の見物からは、文字通り一顧さへも受けなかつた事であらう。

その上不思議な事にこの畫家は、翁鬱たる草木を描きながら、一刷毛も緑の色を使つてゐない。蘆や白楊や無花果を

芥川龍之介　東京市の人。東京帝國大學英文科出身。小説家。昭和二年歿、年三十六。

彩るものは、どこを見ても濁つた黄色である。まるで濡れた壁土のやうな、重苦しい黄色である。この畫家には草木の色が實際さう見えたのであらうか。それとも別に好む所があつて、故意こんな誇張を加へたのであらうか。――私はこの畫の前に立つて、それから受ける感じを味はふと共に、かう云ふ疑問も亦挾まずにはゐられなかつたのである。併しその畫の中に恐しい力が潛んでゐる事は、見てゐるに從つて分つて來た。殊に前景の土の如きは、そこを踏む時の足の心持までもまざまざと感じさせる程それ程的確に描いてあつた。踏むとぶすりと音をさせて、踝が隱れるやうな、滑な淤泥の心持である。私はこの小さな油繪の中に、鋭く自然を掴まうとしてゐる、傷しい藝術家の姿を見出した。さうしてあらゆる優れた藝術品から受ける樣に、この黄いろい沼地の

草からも恍惚たる悲壯の感激を受けた。實際同じ會場に懸つてゐる大小さまざまな畫の中で、この一枚に拮抗し得る程力强い畫は、どこにも見出す事が出來なかつたのである。

「大變感心してゐますね。」

かう云ふ言葉と共に肩を叩かれた私は、恰も何かが心から振ひ落されたやうな氣もちがして、卒然と後を振返つた。

「どうです、これは。」

相手は無頓着にかう云ひながら、剃刀を當てたばかりの顋で、沼地の畫をさし示した。流行の茶の背廣を著た、恰幅の好い、消息通を以て自ら任じてゐる、――新聞の美術記者である。私はこの記者から前にも一二度不快な印象を受けた覺えがあるので、不承々々に返事をした。

「傑作です。」

「傑作――ですか。これは面白い。」

記者は腹を搖つて笑つた。その聲に驚かされたのであらう。近くで畫を見てゐた二三人の見物が皆云ひ合はせたやうにこちらを見た。私は愈〻不快になつた。

「これは面白い。元來この畫はね、會員の畫ぢやないのです。が、何しろ當人が口癖のやうにここへ出す〳〵と云つてゐたものですから、遺族が審査員へ賴んで、やつとこの隅へ懸ける事になつたのです。」

「遺族？ぢやこの畫を描いた人は死んでゐるのですか。」

「死んでゐるのです。尤も生きてゐる中から、死んだやうなものでしたが。」

私の好奇心は何時か私の不快な感情より強くなつてゐた。

「どうして？」

「この畫描きは餘程前から氣が違つてゐたのです。」

「この畫を描いた時もですか。」

「勿論です。氣違ひでもなければ、誰がこんな色の畫を描くものですか。それをあなたは傑作だと云つて感心してお出でなさる。そこが大いに面白いですね。」

記者は又得意さうに、聲を擧げて笑つた。彼は私がこの不明を恥ぢるだらうと豫測してゐたのであらう。或ひは一歩進めて、鑑賞上に於ける彼自身の優越を私に印象させようと思つてゐたのかも知れない。しかし彼の期待は二つとも無駄になつた。彼の話を聞くと共に、殆ど嚴肅にも近い感情が私の全精神に云ひやうのない波動を與へたからである。私は竦然として再びこの沼地の畫を凝視した。さうして再びこの小さなカンヴァスの中に、恐しい焦燥と不安とに虐

まれてゐる傷しい藝術家の姿を見出した。

「尤も畫が思ふやうに描けないと云ふので、氣が違つたらしいのですがね。その點が、まあ買へば買つてやれるのです。」

記者は晴々した顔をして、殆ど嬉しさうに微笑した。これが無名の藝術家が――我々の一人が、その生命を犧牲にして纔に世間から購ひ得た唯一の報酬だつたのである。私は全身に異樣な戰慄を感じて、三度この憂鬱な油畫を覗いて見た。そこにはうす暗い空と水との間に、濡れた黃土の色をした蘆が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るやうな凄じい勢で生きてゐる。……

「傑作です。」

私は記者の顔をまともに見つめながら、呆然としてかう繰返した。

（影燈籠）

三四　知と愛

西田幾多郎

知と愛とは、普通には全然相異なつた精神作用であると考へられてゐる。併し、余は此の二つの精神作用は決して別種のものではなく、本來同一の精神作用であると考へる。然らば如何なる精神作用であるか。一言にていへば主客合一の作用である。我が物に一致する作用である。何故に知は主客合一であるか。我々が物の眞相を知るといふのは、自己の妄想臆斷、卽ち所謂主觀的のものを消磨し盡くして、物の眞相に一致した時、卽ち純客觀に一致した時、始めて之を能くするのである。例へば、明月に薄黑い處のあるのは、兎が餅を搗いて居るのであるとか、地震は地下の大鯰が動くのであるとかいふのは、主觀的妄想である。然るに、我々は天文・地質

西田幾多郎　哲學者。文學博士。京都帝國大學名譽教授。石川縣の人。明治三年生。

の學に於て全然かゝる主觀的妄想を捨て、純客觀的なる自然法則に從うて考究し、爰に始めて此等の現象の眞相に到達することが出來るのである。我々は客觀的になればなるだけ、益〻能く物の眞相を知ることが出來る。數千年來の學問進歩の歴史は、我々人間が主觀を棄てて客觀に從ひ來つた道筋を示したものである。次に何故に愛は主客合一であるか。我々が物を愛するといふのは、自己を捨てて他に一致するの謂である。自他合一、其の間一點の隙間なくして始めて眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは、自分が花と一致するのである。月を愛するのは月と一致するのである。親が子となり、子が親となり、此處に始めて親子の愛情が起るのである。親が子となるが故に、子の一利一害は己の利害のやうに感ぜられ、子が親となるが故に、親の一喜一憂は

己れの一喜一憂の如くに感ぜられるのである。我々が自己の私を棄てて、純客觀的卽ち無私となればなるほど、愛は大きくなり深くなる。親子・夫妻の愛より朋友の愛に進み、朋友の愛より人類の愛に進む。佛陀の愛は禽獸草木にまでも及んだのである。

此の如く、知と愛とは同一の精神作用である。物を知るには之を愛せねばならず、物を愛するには之れを知らねばならぬ。數學者は自己を棄てて數理を愛し、數理その者と一致するが故に、能く數理を明かにすることが出來るのである。美術家は能く自然を愛し、自然に一致し、自己を自然の中に沒することによつて、始めて自然の眞を看破し得るのである。又、我は我が友を知るが故に、之を愛するのである。境遇を同じうし相理解する事が愈〻深ければ深い程、同情は益〻濃や

かになる譯である。併し、愛は知の結果、知は愛の結果といふやうに、此の兩作用を分けて考へては、未だ知と愛との眞相を得たものではない。知は愛、愛は知である。例へば、我々が自己の好む所に熱中する時は、殆ど無意識である。自己を忘れて、唯自己以上の不可思議力が獨り堂々として働いてゐる。此の時が主もなく、客もなく、眞の主客合一である。此の時が知卽愛、愛卽知である。數理の妙に心を奪はれ、寢食を忘れて之に耽る時、我は數理を知ると共に之を愛しつつあるのである。又我々が他人の喜憂に對して、全く自他の區別がなく、他人の感ずる所を直ちに自己に感じ、共に笑ひ共に泣く、此の時我は他人を愛し、又之れを知りつつあるのである。愛は他人の感情を直覺するのである。池に陷らんとする幼兒を救ふに當つては、可愛いといふ考すら起る餘裕もない。

以上、少しく知と愛との關係を述べた。今之を宗教上の事に當てはめて考へて見よう。主觀は自力である。客觀は他力である。我々が物を知り、物を愛するといふのは、自力を棄てて他力の信心に入る謂である。人間一生の仕事が知と愛との外に無いものとすれば、我々は日々に他力信心の上に働いて居るのである。學問も道德も皆佛陀の光明であり、宗教といふものは此の作用の極致である。學問や道德は、個々の差別的現象の上に、此の他力の光明に浴するのであるが、宗教は宇宙全體の上に於て絶對無限の佛陀その者に接するのである。「父よ、若し聖旨に協はば、この杯を我より離し給へ。されど我が意のまゝをなすにあらず、唯聖旨のまゝになし給へ。」とか、「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはべるらん。また地獄におつべき業にてやはべるらん。總じてもて存

自力・他力　共に佛經の語。自己修業のはたらきが自力、佛が衆生を濟度せんとしてあらはす力が他力。

父よ云々　新約全書馬太傳。

念佛は云々　歎異抄第二章。

知せざるなり。」とかいふ語が宗教の極意である。而してこの絶對無限の佛若しくは神を知るのは、唯之を愛するによりて能くするのである。之を愛するが卽ち之を知るのである。印度のヴェーダ教や、佛教の聖道門は之を知るといひ、基督教や、淨土宗は之を愛すといひ、又は之に依るといふ。

各自其の特色はないではないが、其の本質に於て同一である。神は分析や推論によつて知り得べき者ではない。實在の本質が人格的のものであるとすれば、神は最大人格的のものである。我々が神を知るのは、唯愛又は信の直覺によつて知り得るのである。故に我は神を知らず、我唯神を愛す、又は信ずといふ者は、最も能く神を知つて居る者である。

—（善の研究）—

ヴェーダ教　婆羅門教（古代印度宗教の一）のこと。

聖道門　釋迦一代の教法を淨土・聖道の二門に分つ。而して、淨土宗・淨土眞宗・時宗以外の諸宗の大部分は、聖道門と名づく。

三五　日本民族の覺悟

田中寛一

日本民族の前途は洋々として希望に滿ちてゐる。

然しそれは可能性である。この可能性を實現するには、民族の各員の思慮と努力とを必要とする。決して單に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を模倣したりするだけでは實現は出來ない。日本民族の大使命を自覺し、その實現に向つて精進することによつてのみ達し得られる。

フイエは歐洲各民族について考察して、最後に結論として、「未來はアングロ-サクソンのものでもなく、獨逸人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又ラテン人のものでもない。最も聰明で、勤勉で、且最も道德的なものの掌中に歸すべきである」といつてゐる。日本民族の將來を思ふものは、當

田中寛一　明治十三年、岡山縣に生る。心理學者。文學博士。東京文理科大學教授。東京高等師範學校教授。

フイエ　フランスの哲學者。（西暦 1838—1912）

アングロ-サクソン　第五世紀頃、ドイツの北西部から英國に渡つて、今日の英人の先祖となりし種族こゝでは「英國人」の意に用う。

にこの至言を服膺すべきである。

余は前に民族の將來に對する心理的條件を述べた中に歡樂を追求し、贅澤に耽ることが、直接には民族を懦弱ならしめ、不道德に導き、物質尊重主義に傾かしめ、間接には人口減少を招來することを力說した。これは現代文明諸國に於ける一つの通弊であつて、我が國にもその潮流は刻々に押し寄せて來てゐる。我が國でも「武士は食はねど高楊枝」の代りに、「金錢は品性なり」といふ考をもつものが多くなりつゝあるのである。

文明の進步は諸民族間の交通を頻繁にし、箇々人相接する機會を多くするのみならず、印刷物等による思想の傳播を容易ならしめる。その結果、各民族とも新しい習慣、新しい思想、新しい信仰、新しい文藝に接觸する機會が多くなり、在

來の道德思想が權威を失ひ、人々の行動がまち〳〵になり勝である。これは現代の諸民族が經驗してゐる所で、各國の指導者が、その頭を惱ましつゝある問題である。思想の混亂不統一も、或場合には進步の階梯となることがあるけれども、それが極端に走つて一民族の傳統を破壞し去る時には、その民族は自滅するのである。我等が外國の文明に接觸する時に最も心しなければならないのはこの點である。卽ち傳統的な中心思想、中心感情は決して見失はないで、外來の思想や感情は、只傳統的なものに磨きをかけ、それを精錬する材料としてのみ用ゐるべきである。そこで、こゝに少しく外來思想に對する態度について一言しようと思ふ。

由來、人には古いものを棄てて新しいものに就かうとする心の一面がある。その好奇心を滿足せしめつゝ文化の發

達に貢獻する意味で、新しい思想の研究をするのは惡いことではない。すべて思想でも何でも新しいが故に善いといふものではない。これに反して、歴史は尊い。蓋し歴史はその民族に適する思想の發現の迹だからである。同樣に風俗・習慣・道德・宗教等も亦その民族に適するものの殘存したものである。この明かな事實を無視して、徒らに新を追うて外國の眞似をするのは、決して賢い仕方ではない。曾て澤庵亡國論を唱へた人がある。その考によれば、澤庵のやうな滋養分のない消化の惡い物を食つて居れば國が亡びるといふのである。然るに、最近の研究によれば、澤庵にはヴイタミンBを多く含んでゐるから、澤庵を益〻多く食へといふことである。西洋崇拜者の議論にはこの類のものが多い。注意すべきことである。只然し我々の反省しなければならぬことは、

風俗や習慣などの中には、その起る時には相當な理由があつても、時代を經過するに從つて、その理由はとうの昔に消滅して、形ばかりが存續してゐることがあるといふ事實である。その樣な場合には、適當な形にこれを改善する必要がある。然し些細な習慣でも、それを變改するときには、その結果として如何なる影響があるかを、先づ考へなければならない。況や民族の中心思想に影響を及ぼす如き思想の研究者は、極めて愼重な態度を執らなければならない。日本民族の唯一の誇とする忠君愛國の精神、建國の最初から一貫してゐるこの思想は、その根ざす所が極めて深いから、少數の者の變態思想によつて動搖を來すことはないと信ずるけれども、世には附和雷同を事とするものも少なくないから、爲政者と教育家とは大いに注意を拂はなければならない。

從來日本人が、徒らに外國人の行動を摸倣して得々としてゐたことは苦々しいことであるが、それには大いに理由がある。その原因を探して見ると、二つある。その一つは西洋諸國との交通を開いた當時からの惰勢であり、他の一つは、日本の文化についての深い研究がなかつたことである。

西洋文明の特徴は、主として自然科學の研究とその應用とにある。これらは、眼の前に容易に示されるものである爲に、彼と此との差のあることが解り易い。しかもこれは從來最も日本に缺けた點であつた。それ故に、西洋文明に始めて接觸した吾等の先輩が、日本の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのは無理のないことである。その後自然科學の研究は、その進歩に於て殆ど底止する所がなく、一歩否數十歩も後れてゐた日本人は、只單に彼等のやつた迹に追從

して行くだけであつた。これが西洋崇拜の主なる原因である。崇拜の結果は、一も二もなく總べて彼等の行動はよいものと考へ、それを模倣すること一日後るれば一日時勢に後れるやうに思つて、茲に模倣の競爭といふ珍現象を惹き起したのである。誰も彼も一種の暗示にかゝつて、自己を反省することをしなかつたのである。

右のやうな情勢であつたから、その自然の結果として、日本文化に特有なものがあるか否かをさへ考へるものが少なかつた。從つて日本文化の精髄の如何なるものであるかについては、まだ多くの人々はこれを知らない。それは、一つは自然科學の研究を模倣することに較べると著しく困難なことであるにもよるが、一つは一部の人々を除いては、これを探究しようとする心さへも起さなかつたからである。

而してその結果として、傳統的の中心思想をさへ失はうとしたのである。

然し今や西洋文明の正體もほゞ明かになり、心ある人々は內に自ら省みて、日本民族特有の文化を研究しつゝ、しかもそれに囚れず、他方、日本固有の文化に就いて今一層深く研究して、その美點と缺點とを明かにし、東西兩文明の融合に向つて大いに努力しなければならない。日本民族の大使命を果さうとするには、それだけの努力を惜しむべきではない。

—(日本民族の將來)—

終

新制中等新國文　卷七

國文學の系列と作品

一　敍事詩—歷史の系列

一　神話

古事記
日本書紀

二　物語

竹取物語
伊勢物語
大和物語
宇津保物語
落窪物語
源氏物語
狹衣物語
濱松中納言物語
堤中納言物語
住吉物語
取替へばや物語

三　小說

假名草子集
元祿時代小說集
浮世草子集
西鶴集
八文字屋本
雨月物語
京傳傑作集
道中膝栗毛
浮世風呂・浮世床
里見八犬傳
馬琴傑作集

四　傳說

古事記
日本書紀
風土記
今昔物語
宇治拾遺物語
古今著聞集
御伽草子
新編御伽草子

五　歷史

榮華物語
大鏡
水鏡
今鏡
保元物語
平治物語
平家物語
源平盛衰記
吉野拾遺
增鏡
神皇正統記
太平記
義經記
曾我物語

二　抒情詩—隨筆の系列

一　長歌

古事記
萬葉集
菅根集
漫吟集
賀茂翁家集
鈴屋集
良寬歌集
近世長歌・今樣全集

二　短歌

古事記
萬葉集
古今和歌集
後撰和歌集
拾遺和歌集
後拾遺和歌集
金葉和歌集
詞花和歌集
千載和歌集
新古今和歌集
新勅撰和歌集
續後撰和歌集
續古今和歌集
續拾遺和歌集
新後撰和歌集
玉葉和歌集
續千載和歌集
續後拾遺和歌集
風雅和歌集
新千載和歌集
新拾遺和歌集

新後拾遺和歌集
新續古今和歌集
新葉和歌集
林葉累塵集
和歌鳥の跡
近代諸家集
近世名家家集
近代名家歌選
明治初期諸家集
明治名家家集

三 狂歌

古今夷曲集
萬載狂歌集
德和歌後萬載集
狂歌才藏集

四 俳諧

蒐玖波集
新蒐玖波集
新撰犬筑波集
守武千句
紅梅千句
花月千句

犬子集
談林十百韵
虛栗集
芭蕉七部集
蕪村七部集

五 川柳

時代川柳大觀
新川柳大觀

六 隨筆

枕草子
方丈記
十訓抄
徒然草
風俗文選
折焚く柴の記
樂訓
駿臺雜話
鶉衣
雲萍雜志
常山紀談
玉勝間
花月草紙

おらが春

七 日記

和泉式部日記
紫式部日記
更級日記
讃岐典侍日記
十六夜日記
辨內侍日記
中務內侍日記
岡部日記
後の岡部日記
菅笠日記

八 紀行

土佐日記
海道記
東關紀行
野ざらし紀行
鹿島紀行
笈の小文
更科紀行
奥の細道
西遊記・東遊記

三 戲曲—演舌の系列

一 歌謠

古事記
日本書紀
風土記
萬葉集

二 舞曲

神樂歌
催馬樂
朗詠
和漢朗詠集
今樣
安曲

三 謠曲狂言

謠曲
狂言
田樂

四 淨瑠璃

古淨瑠璃及舞の本集
近松門左衞門集
海音集
竹田出雲集
近松半二集
淨瑠璃名作集

五 脚本

脚本集
近松半二集
淨瑠璃名作集
默阿彌全集

大正十年十一月廿一日印刷
大正十年十一月廿四日發行
昭和二年十二月十五日訂正六版印刷
昭和四年二月十八日訂正六版發行
昭和九年十一月三十日訂正七版印刷
昭和九年十二月三日訂正七版發行
昭和十年十月十日訂正八版印刷
昭和十年十月十六日訂正八版發行
昭和十二年七月廿三日訂正九版印刷
昭和十二年七月廿六日訂正九版發行
昭和十三年一月廿五日訂正十版印刷
昭和十三年一月廿九日訂正十版發行

不許複製

新制中等新國文 全十册
定價各册 金五十八錢

編纂者 故三矢重松
右相續者 三矢夏井
補訂者 鳥野幸次
補訂者 折口信夫

發行兼印刷者 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社 代表者 小林竹雄

印刷所 東京市本郷區眞砂町三十六番地 日東印刷株式會社

發兌 東京市神田區美土代町十八番地 電話神田三五一番 振替口座東京三八七八番 株式會社 文學社

關西一手販賣所 大阪市西區靱北通り二丁目 電話土佐堀一五二三番 株式會社 盛文館 振替貯金口座大阪七四三番

小林畫